
B I O H A Z A R D i r r e g u l a r

ダークボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B I O H A Z A R D i r r e g u l a r

【Nコード】

N 3 0 1 6 A

【作者名】

ダークボーイ

【あらすじ】

アメリカ中西部の街、ラクーンシティを突如襲ったバイオハザード。陰陽師の血を引く少年レンは、家宝の宝刀、備前長船と愛銃ベレッタM8000クーガードを手に、友人のスミスと共に生ける死者の横行する地獄の街から脱出を試みる……………

SWORD REQUIEM Vol.1

それは、いやそれらが何時その街に現れたのか正確に思い出せる者はいない。

だが、今やそれらは街中を覆い尽くしていた。

腐臭を放ち、苦悶とも悲鳴とも取れぬ声を上げながら、それらは街中を蠢き、運悪くその前に出てしまった生者達を襲い貪り食らう。その様を見た者達はそれらをこっ呼ぶだろう。

“ゾンビ”と。

気付いた時には、街の大通りを逃げ惑う生者とそれを追うおびただしい数のゾンビ達が溢れ返り、街は地獄の様相を呈していた。

そこへ複数のパトカーが甲高いブレーキ音を立てながら停止し、そこから武装した警官達が次々と降り立つ。

「総員降車！前方ゾンビに向けて構え！」

震えを隠し切れない現場指揮官の声に従い、全員が銃を構える。

そのまま、この世の住人足り得ぬ亡者達が射程範囲に入るのを皆が震え、固唾を飲み込みながら待つ。

「撃てえ！」

号令と同時に、無数の銃口から大量の銃弾が吐き出される。

何の抵抗も見せずにその銃火の洗礼を受けたゾンビ達が、全身に無数の弾痕を刻まれながらよろめき、倒れていく。

だが、その背後から次々と新たなゾンビ達が現れ、それは次第に

警官達との距離を狭めていく。

「怯むな！ここで奴らを食い止めなければ終わりだ！」

現場指揮官の怒声も最早何の効果ももたらさぬのか、ゾンビ達が警官達のすぐ目前にまで迫ってきた。

一人の警官が空になったマガジンを交換しようとした一瞬の隙に、ゾンビがその首筋に食らい付く。

「ぐわあああ！」

警官の絶叫が、他の警官達にパニックをもたらした。

「ひいひい！」

「来るな！来るなあ！」

ある者は逃げ出し、ある者は狂ったように銃を乱射する。

狙いを外れた銃弾がパトカーの燃料タンクに突き刺さり、一瞬にしてパトカーが爆発、炎上する。

「落ち着け、一度後退して隊列をぐわあああ！」

号令の途中で、現場指揮官にもゾンビが襲い掛かる。瞬く間にその体に無数のゾンビが食らい付き、その肉を食い千切り、内臓を引きずり出す。

命令系統を失った警官達は最早抵抗らしい抵抗も出来ず、逃げ惑い、ゾンビの餌食となっていく。

凄惨な地獄を覆い隠そうとするのか、どす黒い空から、静かな雨が街並みへと降り始めていた……………

序章

静かな雨が街並みへと降り注いでいた。

普段ならば、雨の中でも人々は動き、街の営みが行われているはずの通りには、血溜まりと物言わぬ屍とが横たわり、その傍で炎上した車と、本来ならば動かぬはずの屍達の上げる呪詛とも悲鳴とも取れぬ声とが響いていた。

大通りから一つ奥まった所にある雑居ビルの四階の窓から、その様子を見つめていた一人の少年がいた。

“Antique Arms KAKUGOKANRYOU（武器専門骨董店 覚悟完了）”と書かれた看板の陰となっているブラインドの隙間から、つい先程まで行われていた地獄絵図を冷静に観察していた少年――レンは、失意と落胆の混じった溜息をつきながら、窓から離れた。

「どうだ、様子は……」

部屋の奥で震えていた友人のスミスが恐る恐る聞いてきたのに、レンは努めて冷静に答えた。

「ダメだ。警官隊は全滅したらしい」

「どうすんだよ！オレはまだ死にたくねえよ！」

震える手で襟を掴んできたスミスを、レンはなだめながらゆつくりとその手を剥がした。

「どうするも、警察がアテにならないなら自分らでどうにかするしかないだろ」

「どうやってだよ！外には殺しても死なないようなゾンビ連中がう

ようよしてんだぞ！」

「かといってここに居ても飢え死にするか、ゾンビに食われるか、それともその前に自殺するしかない。オレはどれもごめんだけどな」
「そんな……………」

絶句しながらしゃがみこんだ友人を見ながら、レンは深いため息をついた。

（何でこんな事になったんだろう……………）

レン、本名『水沢 練』が日本からアメリカ中西部にある街、クーンシティに引越して来たのはほんの半年前の事だった。

武具専門骨董商である父親の（かなり私的な）事情で両親と妹を含めた4人でこのクーンシティに移住し、地元の高校にも慣れ、友人も出来てこの街にそれなりの満足を覚えていたはずだった。

数日前までは。

数日前に突然議会が出した奇病による非常事態宣言が街を一変させた。

奇病についての色々な憶測が飛び交い、街は重苦しい雰囲気にかまれていった。

もともと、レンはその奇病がそれ程重大な事とは思わず、家族が全員母親の実家の法事だとかで出かけたのをいい事に、昨日は友人のスミス・ケンドと一緒に飲んで遅くまで騒いでいた。

二日酔いの頭に響く騒音で目覚めた二人が見たのは、人々を襲うゾンビの群れと、それと警官隊が必死に戦っている地獄絵図だった。

最初は酔って悪夢を見ているのかと思う程現実離れた光景だったが、急激的に覚めていく酔いと、リアル過ぎる銃声と人々が上げる断末魔の絶叫が嫌が応にもそれを現実だと認識させた。

そして、その悪夢じみた現実はいくらが本番だった……………

「オレ達はまだ運がいい方だろう。少なくともここに居たって事がない」

まだ震えているスミスを伴って、レンは住居と繋がっているテナント部分へと入った。

そこには、銃火器や刀剣、防弾チョッキやプロテクター、果ては西洋甲冑に至るまで古今東西のありとあるゆる武器、防具が陳列していた。

「骨董品だろ？使えるのか？」

「表向きは骨董品って事になってるが、ほとんどが使用可能な品ばかりだからな。こっちに來たのも合法的に銃が手に入るからだって前に言っただろ」

スミスの疑問にかなり物騒な返答を返しながら、レンは自分のサイズに合った物を物色し始めた。

「何でもいい。武器と防具、それに役に立ちそうな物を持ってこの街から脱出するぞ」

「お、おう」

レンに習ってスミスも適当な物を物色し始める。

レンは着衣を脱ぐと下着の上から愛用のタクティカルスーツを着こみ、その上に防弾チョッキを重ねる。更にその上から無数のポケットの付いた多機能ベストを着込み、頑丈なコンバットブーツを履

く。

手足には硬化樹脂製のプロテクターを身に着け、腰にはホルスタ
ーといくつものパウチが付いたガンベルトを巻き、最後に本来なら
は近接格闘用の金属粉入りのグローブを着ける。

少なくともこれなら丸腰よりはマシだろう、と思いながらも次に
武器を探し始めたレンの耳に鈍い金属音が聞こえた。

音のした方向へと振り向くと、そこにはどうやって着込んだのか
西洋甲冑に身を包んだスミスの姿が有った。

「どうだ、これならゾンビだって怖くないぞ」

「ほう、それでどうやって歩くんのだ？」

「……………」

自信満々のスミスに冷ややかな目を向けながらのレンの問いに、
スミスは沈黙した。

そのままその場でガチャガチャと音を立てながら数歩歩くと、無
言のまま甲冑を脱ぎ始めた。

「そっちの方にもう一着防弾チョッキが有ったはずだ。そいつを着
ておけ。あと、武器は右側に並んでるのがレプリカで左側のが本物
だ。好きなものを選べ」

「それじゃ好きなのを、と」

銃を手にした途端、スミスの目が真剣な物へと変わる。

（相変わらずだな）

その様子を何度か見た事の有るレンは素直に感心した。

家が銃砲店のせいか、スミスの銃に対するこだわりが尋常でない事
はレンもよく知っていた。

そもそも彼と友人になったのも趣味が似通っていた為だった。

もつともそのお陰で二人してクラスでは多少浮いているのもまた事

実だったが。

レンは店の売り物とは別に並んでいるコレクション用の銃の中から持っていく銃を選び始めた。

選んだ銃はベレッタM8000クーガード。

ダブルアクションのみのどちらかと言えば護身用の威力の低い銃だが、その手軽さをレンは気に入っていた。

マガジンに弾丸を込め、初弾を装填してホルスターに収め、残った弾丸はパウチとポケットに分けて入れると、レンはおもむろに店の奥へと目を向けた。

そこには、神棚とそこに祭られた一振りの日本刀が有った。

それに向けてレンは二度柏手を打つと、祭られている日本刀を手に取り、鞘から抜いた。

鮮やかな刃文が部屋の明りを反射して、鈍い光を放つ。

「おい、まさかそのマサムネブレード持っていく気か？」

「ああ、オレは銃よりもこっちの方が得意なんでね」

モスバーグM500ショットガンに弾を込めていたスミスが顔をしかめる。

それを気にも止めずにレンは重さを確かめる為に何度か刀を振るうと、鞘に収めてガンベルトへと差した。

「正気かよ。いくら日本人だからってサムライ気取りだと本気で死ぬぞ」

「気取ってる訳じゃないさ。それにこいつは正宗じゃなくて備前長船（備前長船）だ。家の家宝で由緒正しい名刀だ」

「オサフネだかなんだかしらんが、それでゾンビと戦えるのか？」

「やってみなくちゃ分かんが、さっき見ていた限りだと、あのゾンビ連中も不死身じゃないみたいだ。少なくとも頭吹っ飛ばすか、動けなくなる位切り刻んでやればなんとかなる」

「オレはこつちを使って前者の方が手っ取り早いと思うけどな」

スミスはそう言いながら手もとのルガー・レッドホークマグナムを持ち上げた。

44マグナム弾使用のそれならば確かにゾンビの頭くらい一たまりも無く吹っ飛ぶだろう。

「弾が有ればそうしたいんだがな」

レンは他に弾が無いかと辺りを探したが、お互いの手元にある分以外は見つからない。

「まずったな、この前の射撃訓練で使い過ぎたか……」

「射撃訓練つて、お前とお前の親父の二人で射撃場の的全部使ったってあれか？」

スミスが呆れ顔で呟く。ちょうど一週間位前の新聞に“日本人親子射撃場制圧！”のタイトルで三面記事を飾っていたのは彼の記憶にはつきりと残っていた。

「仕方ない。取り合えず後は医薬品と食料を……」

そう言いながら居間の方へと向けたレンの視界に、昨日二人して飲み食いした証拠の山のようなゴミが入ってきた。

レンの脳裏に、おぼろげながら冷蔵庫に残っていた物をほとんど食ってしまった様な記憶が思い出される。

「えーと、確か救急箱がこつちに」

それを振り払うように無視すると、レンは救急箱から包帯、消毒

薬、救急スプレー等を取り出し、スミスと二人で半分ずつ分けて持った。

せめて何か無いかと食料棚を探すと、奥に一升瓶が有るのを見つけた。

「何だそれ？」

「父さんの秘蔵の一級純米酒だ。こんなとこに有ったか」

一升瓶を見た事の無いスミスに説明しながら、レンは一升瓶のフタを開けると、中身を一口含み、刀を抜いてその刃へと吹きかけた。

「何やってるんだよ？」

「御清めだ。これからこいつに命を預ける事になるからな」

刀を振るって余計な水分を振り落とすと、刀を鞘に収め、グラスを二つ取り出すとそれへ一升瓶の中身を注ぐ。

「飲むか、景気付けだ」

「貰おうか」

スミスはグラスを手にとると、その中身を一息に飲み干した。

「……美味しいな、これ」

「当たり前だ。新潟産の一級酒だ。飲んだのがばれたら父さんに殺される」

レンはスミスと対称的にゆっくりとグラスの中身を飲み干すと、グラスを傍のテーブルへと置いた。

「もう一杯ダメか？」

「残りはこの街を脱出出来たら祝杯で飲ませてやるよ」

そこいらを物色して出て来た小さな水筒に一升瓶の中身を移すと、レンはそれを唯一何も入っていないガンベルトのパウチへと入れる。

「さてと、覚悟はいいか？」

「お、おうよ。ゾンビだろうが何だろうがやってやるうじゃないか」

スミスの声は明らかに震えていた。言った後で唾を飲みこむ音はつきりと聞こえる。

「じゃあ、行くぞ」

腰の刀に油断無く手を掛けながら、レンは玄関のドアノブへと手を伸ばした。

ノブを掴んだ瞬間、知らない内に手の平に汗をかいていたのに気付くが、構わずノブを回し、ゆっくりとドアを開けた。

この悪夢の街から脱出する為の、それが第一歩だった。

SWORD REQUIEM Vol.2

第一章

今までの人生の中で一番時間を掛けながらレンは玄関のドアを開けると、用心深く周囲を見渡した。

周囲に人影が無いのを確認すると、雑居ビルの四階にある店舗兼自宅から通路へと出る。ただそれだけの動作に、全神経が異常なまでの緊張をしているのをレンは感じていた。

「大丈夫だ。ここにはいないみたいだ」

半ば自分に言い聞かせるようにしながら、背後にいるスミスに外に出るように促す。また唾を飲みこみながら、スミスが周囲を見渡しながら通路へと出た。

12

「まず、警察署に行こう。少なくともここよりは安全だろう」

「お、おう……」

震える手でモスバークを握り締め、スミスがレンの後に続く。

二人で辺りを警戒しながら、ゆっくりと階段を降りる。階段の踊り場に出る度にスミスが唾を飲みこむ音が何故か不自然に大きく聞こえた。

ようやく一階に続く階段の踊り場に辿り着いた所で、ふとレンの足が止まる。

「どうした？」

「しっ」

口に指を当てながら、レンが階段の下を指差す。そこには向こう側を向いたゾンビが一体立っていた。

（ど、どうする？）

（やり過ぎればいいんだが……）

小声で話し合っていた所で、突然ゾンビがこちら側へと振り向き始める。

それを見たレンが覚悟を決めて猛烈な勢いで階段を降り始めた。

（先手必勝！）

階段の最後の段を降りると、もうゾンビが目と鼻の先にいた。

こちらに気付いたゾンビが動くよりも速く、レンは左足に力を込め、降りた勢いを乗せて一気に抜刀した。

思っていたよりも軽い手応えを残して、名刀はゾンビの体を通過、一瞬の間を置いてゾンビは腰から斜めに切断された。

ゾンビの上半身が床へと鈍い音を立てて落ちる。

息を一つ吐いて、レンは初めて人間を斬った事実を認識しようとしたが、上半身だけになったゾンビがそれでもこちらに這い寄ろうとするのを見て、とっさに左手で腰のホルスターからクーガードを抜くとゾンビの頭へと向けて連続してトリガーを引いた。

鈍い音を立てて9ミリパラベラム弾がゾンビの頭を肉片へと変えると、微かにケイレンしながらゾンビはようやく動きを止めた。

「……………やったのか？」

「ああ、なんとか……」

言葉の途中で、突然ガラスの割れる音が響き渡る。驚いた二人が前を見ると、そこには入り口のガラス製の自動ドアを突き破ったゾ

ンビ達の姿が有った。

レンは慌てて裏口へと続く後ろの通路を見るが、そこにもこちらへ向けて迫ってくるゾンビ達が見えた。

「スミス！後ろを頼む！」

「おい、待てよ！」

スミスの静止の声を聞くよりも、レンが前方のゾンビの群れへと突っ込んでいく方が速かった。

最初に一番左側にいるゾンビへと向けて振り上げた刀を肩口へと袈裟斬りに振り下ろす。

その体がゆっくりと傾いていくのを横目で見ながら、その隣にいるゾンビへと向けて刀を真横に振るう。

振るわれた刃は一体目の胴を両断し、その隣にいたゾンビの胴をも半ばまで両断するが、半ばまで両断されたゾンビが血と臓物を撒き散らしながらまだ近付こうとするのに気付いたレンは、その額へと向けてほとんどゼロ距離でクーガードのトリガーを引く。

額を撃ち抜かれたゾンビが倒れていくのを横目で見ながら、レンは手首を返して刃を真上へと向けると一番右側にいたゾンビの胸の辺りへと向けて刀を水平に突き刺す。

刃の半分程がゾンビの体へと突き刺さると、そのまま刀を真上へと斬り上げる。

やや硬い感触を残し、ゾンビの顔面を縦半分に斬り裂きながら刃は頭頂へと抜けた。

「来るな、来るんじゃない！」

背後でスミスの怒声と銃声が響いていたが、お互いの状態を確かめる事もままならない。

レンは必死になりながらもゾンビ達を斬り裂き、弾丸を撃ち込ん

だ。

随分と長い時間に感じられる時間が過ぎ去り、床を這ってきた最後のゾンビに弾丸を撃ち込んだ所でクーガードのスライドが後退したまま停止、弾丸が尽きた事を知らせた。

肩で息をしながらレンが後ろを振り向くと、同じように肩で息をしながら構えていたレッドホークをゆっくりと降ろすスミスの姿があった。

「無事か……………」

「一応……………」

スミスの返答を聞きながら、レンは壁に背中からもたれかかると崩れるようにして床へと座り込んだ。

「そっちは？」

「生きてる」

そのままの状態で刀を床に置くと、レンはクーガードのマガジンを抜いて弾丸を装填する。

同じく床へと座り込んだスミスもそれに習って弾丸の再装填を始めた。

しばらく弾丸を込める音だけが静かに響いていたが、おもむろにスミスが口を開いた。

「なあ」

「なんだ？」

装填を終えたマガジンに戻しながらレンが返事をする、疲れ切った声でスミスが続けた。

「ひょっとして、この先もずっとこんな調子なのか？」
「最悪の場合はな」

しれっとしたレンの返答に、スミスの手が止まる。

それに構わず、レンは立ち上がると床に置いておいた長船を手に取り、何度か振るって刃に付いた血や油を落とす。

「勘弁してくれよ、ずっとこんなんじゃないやオレぜってえ死んじまうよ」
「どっちにしる何もしないで死ぬよりはマシだ。それに逃げられるようだったら逃げればいい」

泣き言を言うスミスを尻目に、レンは持ってきたペーパータオルで刃にこびり付いた腐肉を拭き取る。刃がキレイになったのを確かめると、刀を鞘へと収めた。

「おめえは怖くないのかよ」
「怖いさ。でも怖がってて助かるんだったら苦労はしない」

どこか冷め切った表情のレンを見ながら、スミスはモスバーグのポンプをスライドさせた。

「強いな、お前」
「さあな……………」

立ち上がりながら、スミスは感心したような目でレンを見た。

（こいつはホントに強い……………）

心の底からスミスはそう思った。今でもそこいら辺に散らばっている肉片や臓物で吐きそうな自分に比べ、レンはそれらを見てもほ

とんど顔色を変えていない。

（やっぱりサムライだよ。お前は）

心の中でスミスはそう呟くと、レンの方へと向き直った。

「さて、行こうか」

「ああ」

レンの声に、スミスは力強く答えた。

もはやドアとしての役割を果たさなくなった自動ドアをくぐり、二人はマンションの前の通りに出た。

周囲にいたゾンビがあらかた集まっていたのか、不思議と静かに雨が降り注ぐ通りには人もゾンビも姿が見えなかった。

そのまま、大通りの方へと二人は無言で歩き始める。大通りの手前で明らかに食い殺された形跡のある死体を見つけると、レンはその傍へとゆっくりと近付いた。

「おい、何やってんだよ」

スミスの問いに答えず、レンは注意深く死体を観察すると、突然刀を抜いてその死体の首筋へと突き刺した。

「お、おい！」

「介錯だよ。首を切ればゾンビも死ぬみたいだからな」

慌てるスミスに刀を抜きながらレンは短く答えると、空いている

左手で拝む仕草をした後、刀を振るって鞘へと収める。

「下の階に住んでいたボブさんだ。いつも吹雪並の寒いジョークばかり飛ばしてたけど、いい人だった」

表情を曇らせながら、レンは死体から離れる。その顔が蒼ざめているのがスミスの目に写った。

「行こう」

それだけを言いながら、レンは知人の死体から急ぐように離れた。大通りにはつい数時間前まで繰り広げられていた戦闘の爪痕がありありと残されていた。

通りは警官と逃げ遅れた民間人、そしてゾンビの死体で埋め尽くされ、あちこちにクラッシュした車が放置され、その内のいくつかが炎上して雨で薄暗い通りを紅く照らしていた。

「ひでえな、こいつは」

青い顔でばやきながら、スミスが用心深く死体を避けながら大通りの中央へと出る。

そこで周囲を見渡すが、少なくとも見える範囲内の大通りは全て似たような状況だった。

「車がバイクが使えればよかったんだが、これじゃ戦車でも無きや無理だな」

少し血の付いているパトカーのボンネットに肘を掛けながら、レンもばやいた。

ふとパトカーの中を見ると、空いたまま壊れているドアから中を

物色し始めた。

「今度は何してるんだ？とうとうパトカーから置き引きか？」

「弾を探してるんだよ。この調子じゃ何発有っても足りそうに無いからな。お前も手伝え。それともその辺にいる勇敢な殉職警官達から分けてもらうか？」

目的の物が無いのを確認したレンが他のパトカーを物色し始める。さすがに死体を触る気になれないスミスも同じようにパトカーを物色しようと傍の一台に近付いた。

「う……う………」

スミスがドアを開けようとした途端、そのパトカーにもたれ掛かるようにしていた警官が低いうめき声を上げて僅かに動いた。

「ひっ！」

「待て！」

悲鳴を上げながらモスバークを向けようとしたスミスをレンが静止させると、慌てて傍へと駆け寄った。

「生存…者か…」

僅かに身じろぎをしながら、そう呟いて警官は薄く目を開けた。

「ああ、そうだ。これからこの街から脱出する為に警察署に向かうとしている所だ」

「だ…めだ………」

レンの声に、警官は力無く首を左右に振った。

「この事件は……どこか……おかしい……ゾンビが……現れる……ずっと前から……しょ長が……妙な指示ばかり……出していた……今思えば……しょ長は……何か……知っていた……署はキケン……」

そこまで言った所で、警官は咳き込み咳と一緒に血を吐き出した。

「大丈夫か!？」

レンが慌ててペーパータオルを差し出すが、警官はそれを拒絶した。

「オレは……もうダメ……だ……この街から……にげたい……ここから……8番……どおりを抜けて……西へ向かえ……バリケードで……ゾンビ達は……入ってこれない……はず……」

震える手で通りの向こうを指差しながら、警官はかすれた声で脱出路を教える。

「最後に……頼みが……ある……」

「何だ？」

「死んで……も……ゾンビ……になりたく……ない……オレの……頭を……撃ちぬい……」

そこまで言った所で警官の頭がカクンと下に下がる。

「しっかりしろ!おい!」

レンが警官の体を揺さぶるが、もはや警官の体からは生命が完全に失われていた。

「死んだのか……」

「ああ」

警官の体から手を離しながら、レンは低く呟く。そして、ホルスターからクーガードを抜くと、警官の額に銃口を当て、トリガーを引いた。

「彼の最後の頼みだ。これが脱出路を覚えてくれたせめてもの恩返しだ」

震える手でクーガードを降ろしながら、自分に言い聞かせるようにレンはそう言うと、警官の死体に背を向けた。

「なあ、スミス」

「なんだよ」

「もし……オレが死ぬか、ゾンビになったら……同じようにオレの頭を撃ち抜いてくれ」

「……」

レンの突然の言葉にスミスが絶句する。

拳を硬く握り締めたレンの顔には、悲痛の覚悟が秘められていた。

「出来ないね」

「どうしてだ？」

スミスは向こうを向いているレンを強引に自分の方へと振り向かせると、強くレンの両腕を握り締めた。

「出来る訳が無いじゃねえか！お前がそんな状態になるんだったら、

オレなんかとつくの昔に死んでるよ！だからそんな事は考えるんじゃない！絶対二人で生き残ってこの街から脱出するんだ！」

「スミス……………」

予想外に強い口調でのスミスの断言に、レンが驚きの表情を浮かべる。

何秒かそのままお互いを見つめていたが、ふとレンが微笑みを浮かべて視線をそらした。

「ありがとう」

「な、なんだよ。お前にそんな事言われると気持ち悪いな」

突然礼を言われてスミスは照れを隠しながら、握り締めていた手を離れた。

「さあ、ゾンビになんねえ内にとっと行こうぜ」

「ああ、そうだな」

先に行こうとするスミスの後を追って、レンは警官の指差した方向へと歩き始めた。

が、角を曲がろうとした時そこから誰かが覗いているのに気付いたレンが慌てて刀に手を掛ける。

「誰だっ!？」

「きゃあああっ!」

そこから悲鳴を上げながら一人の女性が身をひるがえして走り出す。

「生存者!？」

「追うぞ！一人にしとくのは危険だ！」

二人は大慌てでその女性の後を追いつめた。

嫌！もう嫌！

なんで私はこんな所にいるの？

生きているのは私一人。

他は全部化け物ばかり。

この間まで普通に暮らしてたはずなのに、何でこんな事になったの？

また化け物が来たわ！

嫌！来ないで！

（アンシンシロ、オレタチハニンゲンダ！）

（ココハキケンダ。ハヤクニゲヨウ）

人間の言葉を喋っているけど信じない。

あいつらは警官を殺していたわ。

だから化け物の仲間よ。

それに人間は私一人だけなんだもの。

銃だって扱えるわ、撃つわよ！

だから早く何処かに行つて！

「ちょっと待て！」

「やばいぞ！こいつ！」

ようやく見つけた女性に声を掛けようとした途端、銃を突きつけられた二人は慌てて逃げ出す。

その背中に乾いた発砲音が重なった。

「マジで撃ちやがった！」
「隠れる！」

建物の影に隠れた二人が荒い息をしながら顔を見合わせた。

「どうなってるんだ……………」
「どうやら彼女発狂してるみたいだな……………無理も無い。街がこの状況じゃあな」

レンが建物の影からそつと様子を窺うが、すでに女性の姿は見えなかった。

「何処かにいったようだが、どうする？」
「物陰から撃たれたりしないよな？ゾンビから逃げて人間に撃ち殺されるなんてシャレになってないぞ」
「持ってた銃は22口径だったな。頭にでも当たらない限り死にはしない」

レンは慎重に周囲を見渡しながら、ゆっくりと通りへと足を踏み出す。

その時、通りの向こうから女性の悲鳴が聞こえてきた。

「しまった！」
「おい、待てよ！」

走り出したレンの後を追って、スミスも走り出す。
通りを曲がった所で二人は先程の女性が無数のカラスに襲われているのに遭遇した。

「助けるぞ！」

「お、おう」

レンは素早くクーガードを抜くと、慎重に狙いを定めて発砲、発射された弾丸は一羽のカラスを撃ち抜く。

が、それを合図にしたかのようにカラス達はレンとスミス達にも襲い掛かってきた。

「こなくそ！」

「はっ！」

スミスは上へと向けてモスバークを連射して次々とカラスを撃ち落していき、レンは最上段に向けての変形の居合でカラス達を斬り落としていく。

最後の一羽が縦に両断されて路面へと落ちると、レンは刀を一振りして鞘に収めながら女性へと歩み寄った。

「もうだいじょ……」

「嫌、来ないで！化け物は嫌！私は人間でいたいのに！」

女性はレンが差し出した手を振り解くと、突然銃を自分のコメカミへと向けた。

「！止める！」

レンが銃を奪おうとするよりも、彼女がトリガーを引く方が早かった。

小口径弾特有の乾いた銃声が、通りに木霊する。

小さな音を立てて、女性が路面に倒れ伏す。

レンもスミスも目を見開いたまま、その光景を信じられないといった顔で見つめていた。

「……………助けられなかった……………」

レンが目を見開いたままの女性の死体を見ながら、小さく呟く。

「……………仕方ないさ、こいつはもう……………」

スミスが力の無い声で語り掛けるが、レンは拳を力強く握ったまま微動だにしない。

その肩は小さく震えていた。

無言でレンはしゃがみ込むと、見開いたままの女性の瞳をそっと閉ざした。

「己を貫けぬ者が闇を見れば闇に捕らわれる……………」

「なんだそりゃ？」

「剣を教えてくれた伯父の口癖だ。今、その意味が分かった……………」

レンは女性に向けて拝む仕草をすると、スミスに背を向けたまま立ち上がる。

「オレにもう少し力が有れば、あるいは……………」

「レン……………」

「行こう。悲しんでいる暇は無い」

「ああ、そうだな」

名残を惜しむ暇も無く、二人は歩きだした。

生き残る為に。

SWORD REQUIEM Vol.3

第二章

タタン………タタン………

薄く水を張った路面に、定期的な音と共に波紋が立つ。

タタツ…タタツ…

不意にその間隔は短くなっていき、
タンッ

最後に一際大きな音と波紋を残し、音の主は見つけた獲物へと襲い掛かった。

「はっ！」

腐臭の混じる唾液を滴らせながら飛び掛かってきたゾンビ犬に向けて、レンは気合と共に水平に抜刀、その胴体を両断する。

「このやろっ！」

その背後では、同じようにして襲い掛かろうとしているゾンビ犬へと向けて、スミスがモスバークを発射。

一度態勢を崩しながらも、なお唸り声と共に立ち上がるうとするそれに更に駄目押しの散弾を撃ち込む。

地面に倒れたゾンビ犬が起き上がってこないのを用心深く確認しながら、スミスは構えていたモスバークをゆっくりと降ろした。

「どうなってやがんだよ、全く。最初はゾンビの大群、次は狂暴なカラス、今度は犬のゾンビと来た。次は何だ？猫かネズミかゴキブリか？」

「さすがにネズミやゴキブリともなると小さくて斬りにくいな。せめてアライグマくらいなら……………」

本気が冗談か判断しかねるような事を言いながら刀を鞘に収めようとしたレンは、上半身だけになったゾンビ犬がまだ唸り声を上げながら前足だけでこちらに近付こうとしているのに気付き、顔をしかめながらその首を斬り落とした。

「分かったのはどうやらゾンビ化したのは人間だけじゃないって事だ。この様子だとこの街にいるほとんどの生物がゾンビ化している可能性が考えられる。」

「アライグマもか？」

減った分の弾丸をモスバーグに補充しながらスミスが茶化す。

「精々襲われて洗われない様に気を付けるか」

レンが刀に付いた血を振るい落としながらそれに応じる。あまり抑揚の無い口調（普段からこんな感じだが）で言われたので、スミスは思わず“襲った人間の手足を洗って食おうとしているアライグマゾンビ”を想像してしまい身震いする。

「それならまだしも、最悪の場合動物園の猛獣がゾンビ化している可能性だってあるな」

「ゾンビになったら猛獣だろうが草食動物だろうが関係…無い……ような……」

ふとそこでスミスはある事を思い出す。

「なあ、そういえば街外れでワニ飼っている家無かったか？」

「ああ、1mにもならないようなのを飼ってたところ有ったな。一月位前に一匹いなくなっただってみんなして騒いだ…」

そこまで言っただけでもスミスの言わんとしている事を理解し、顔を見合わせた。

「で、でも1m位の奴ならなんとか……」

「ワニってのは結構速く動かし、姿勢が低くて狙いにくい上に表皮も硬い。いきなり襲われたら対処できるかどうか自信は無いな」

冷静に分析するレンに恨みがましそうな視線を向けながら、スミスはおもむろに前へと歩き始めた。

あの警官が言った通り、バリケードのお陰で二人はここまでほとんどゾンビとは会わずに進んで来れた。

時たま脇道にいるゾンビを見掛ける事も有ったが、向こうが気付く前に逃げれば無事にやり過ごせるらしい事が分かり、猛ダッシュでその場から離れる事で戦闘は回避していた。

「にしても、西に向かえって言われても、こっから街外れまで何kmあると……」

「それじゃあそこから近道するか？」

愚痴りながら歩くスミスに、レンが斜め前に見えてきたバリケードを指差す。

そこからは、バリケードを叩く音と共に、大量のゾンビ達の呪詛が聞こえてきていた。

「絶対にゴメンだ。街外れどころか10mも行かねえ内にゾンビ達の腹に直行しちまう」

「そついう事だ。とつとどこから離れよう」

小走りで二人がバリケードの前を過ぎた瞬間だった。

突然後ろから大きな音が響いた。驚いた二人が後ろを見ると、そこには倒れたバリケードとひしめくゾンビ達の姿が有った。

「！逃げ！」

走り出そうとしたスミスが、言葉の途中で何かに足を掴まれ転倒する。

慌てて足を見たスミスの目に、バリケードが倒れる拍子に一緒に倒れたらしいゾンビが自分の足首をガッチリと掴んでいるのが飛び込んできた。

「スミス！！」

「離せ！ 離しやがれえええ！」

スミスは必死にもう片方の足でゾンビの手を蹴るが、異常なまでの握力で足首を握る手は緩まる気配は無い。

レンが助けに行こうとするが、その時すでに先頭のゾンビ達が動けずにいる獲物を見つけ群がろうとしている寸前だった。

（やるしかない！）

レンはゾンビ達の目前で急停止すると、刀に手を掛けながら息を大きく吸い込む。

体はゾンビに対してほとんど真横を向き、吸い込んだ息は半ば強

引に肺に貯める。

そして、足音が響く程強く右足を踏み込んだ。

「はああああああ！！」

肺に貯めこんだ息を気合と共に吐き出し、大きく体を回転させながらレンは低い軌道で抜刀した。

「ああああああああ！」

刃がゾンビ達の足を斬り裂いてもレンはそのまま体を回転、それに応じて刃はその軌道を少し上に変化させ、続けてゾンビ達を斬り裂く。

「ああああああああ！」

それでも回転は止まらず、刃は螺旋状の軌道を描きながらゾンビの足を、腹を、胸を、首を次々に斬り裂いていった。

ちょうど刀を斜め上に掲げたような状態になって、レンはようやく回転を停止。

その頃にはスミスに迫っていたゾンビ達は全て輪切りにされた肉の塊となって地面へと落ちた。

「ひいっ！」

自分の足に降り注ぐゾンビ達のパーツにスミスが悲鳴を上げるが、その内の一つが偶然足首を掴んでいたゾンビの腕に当たり、握力が緩んだ拍子に足首を引き抜く事に成功した。

「逃げるぞ！」

「言われなくても！」

立ち上がりながら自分の足首を掴んでいたゾンビに一発、こちらに気付いて近付こうとしているゾンビ達にも一発散弾を撃ちこむと、スミスはレンの後に続いて走り出した。

「追ってくるぞ！」

「意地でも引き離せ！」

レンは走りながら振り向くと、一番先頭にいたゾンビに向けてクーガードを連続して発砲、ゾンビの体が傾くのを横目に見つつまた走り出す。

「ゾンビが走んな！」

スミスもそれに習って振り向くと、モスバーグを発砲してまた走り出す。

しばらく走っては撃ち、撃っては走りを繰り返すが、ゾンビ達はその数は減らしても一向に二人の追跡を止める気配は無い。

ちょうど二人同時に振り向いて撃った瞬間、双方の銃が同時に弾切れを起こす。

「ガッデム！」

悪態を付きながらスミスは腰のホルスターからレッドホークを抜くと連続して44マグナム弾を発射、がすぐに弾切れを起こす。

「くそっ！ くそっ！」

急いでシリンダーをスライド、空薬莢を地面に落として次弾を装

填しようとするが、慌てている為か、なかなかうまくいかない。

（どうする？ どうすればいい？）

レンはゆつくりとこちらに近付いてくるゾンビの群れと、なかなか装弾出来ないでいるスミスを交互に見ながら考えた。

左右は建物の壁で逃げ道は無い。

ふと、レンは前方に建物の内部へと続くドアを発見した。

「スミス！ あそこに逃げ込むぞ！」

ようやく装弾を終えたレッドホークを発砲しながら、スミスはレンが抜いたままの刀で差しているドアを見た。

「あん中にゾンビがいないって保証は！」

「無いっ！ だけどこのまま最悪の鬼ごっこするよりはマシだ！」

レンの言葉にスミスがうなずくと、レッドホークを立て続けに速射、弾が尽きた所で二人そろってドアへと走り出した。

ドアを突き破らんがばかりの勢いで開けてその中に飛び込み、大慌てでドアを閉めると鍵を掛ける。

それだけに留まらず、ドアの傍に有った重そうなスチール棚、掃除用具入りのロッカー、中身入りのダンボール箱等を次々にドアの前へと積み重ねる。

追い着いたゾンビ達はそのドアを叩く頃には、ドアはそう簡単に開けられない程のバリケードで埋め尽くされていた。

「助かった……………のか？」

「あいつらからはな……………」

お互い肩で息をしながら、床へと座り込む。スミスはそのまま床に大の字に転がった。

レンは未だに刀を抜いたままだった事に気付くと、軽く振って鞘へと収め、呼吸を整えながら周囲を見渡した。

そこはどうやらどこかの倉庫らしく、広い部屋の中には色々な物が納まっているダンボール箱が整然と並んだスチール棚に無数に置かれていた。

「ところで、ここはどこだ？」

「知らん。確かめているヒマなんてあるか」

ようやく落ち着いてきた呼吸を整えながらスミスがむっくりと起き上がり、その場に座り込んだままの状態で弾丸を装填し始める。

「どうやらどこかの店の倉庫みたいだが……」

レンはダンボール箱の中に入っているドリンクや雑貨などを見ながら、ポケットから取り出した弾丸をクーガードのマガジンへと詰める。

「どこでもいいさ。ゾンビがいなけりゃな」

レッドホークの装弾を終え、モスバークへと取り掛かりながらスミスがぼやく。

レンが見渡した限りでは少なくともこの倉庫の中で動いているのは彼らと、壁に取り付けられた換気扇だけのようだった。

装弾を終えたマガジンをクーガードへと戻し、初弾をチェンバーへと込めると、ガンベルトのパウチやベストのポケットをまさぐって残弾数を確かめ始める。

「ところでレン」

「何だ？」

「さっきオレが食われそうになった時、何やったんだ？」

装填を終えたモスバーグのポンプをスライドさせて初弾を装弾させながらのスミスの問いに、パウチにギチギチに詰められていた弾丸を取り出しやすいようにいくつかに分けてベストのポケットに仕舞いながらレンは答えた。

「あれか。オレが習った剣術、光背こうはい一刀流の技で《光螺旋ひかりらせん》、英語で言えばシャイニングスパイラルとでも言う技さ」

「あんなすげえ事出来るんならもっと早く使えよな」

「成功したのはあれで三度目だ」

「……………」

失敗していたらどうなっていたんだろうか、という考えを精神力で必死に頭の片隅に追いやりながら、スミスは立ち上がってズボンのホコリを払おうとした所で、自分のズボンが血と腐肉まみれの事に気付いて顔をしかめた。

「取り合えず、出入り口を探すとするか」

「そうだな」

二人そろって倉庫から建物奥へと続く扉を目指して歩き始める。

二人がその扉をくぐったすぐ後で、彼らを追って天井を這う影がいる事を二人は知るよしも無かった。

扉をくぐった所で二人が一番最初に目にしたのは、棚に陳列された香辛料の列だった。

「ここつて、ひょっとしてRマートか？」
「みたいだな」

そこはラクーンシティで一番大きいショッピングセンターだった。普段ならば買い物客で賑わっているはずの店内は不気味なまでに静まり返り、ただ商品維持用の冷却器がたてる音が妙に大きく響いていた。

「運がいいのかもな」

「何がだよ」

「少なくともここで食料が入手出来そうだ」

「ゾンビがいなけりゃな」

二人は周囲を警戒しながら店内を探索し始めた。

「ひっ！」

三分も立たない内に、スミスは陳列棚の影から伸びている足を発見した。

「に、人間とゾンビ、どっちだと思う？」

「襲ってくればゾンビ、でなけりゃただの死体だ」

「ま、まてよ」

刀に手を掛けながら近付こうとするレンを震える声で静止させ、スミスが傍に有ったモップで軽くその足を突つく。しかし、足は何の反応も示さない。

「死んでるのか？」

「じゃなきゃ死んだふりだ」

陳列棚の影で見えない体の方へと用心深くレンは回り込む。その死体の下に大量の血溜りを発見すると、無造作に死体に手を掛け、それをひっくり返してあお向けにした。

「お、おい！」

「心配無い。こいつはただの死体だ。だが…」

スミスもその死体の方へと目を移す。それはこのショッピングセンターの制服を着た中年の男性の死体だった。

「こいつを見る」

「なんだこりゃ！？」

スミスもすぐにその死体の異常に気が付いた。それは街で見かけた死体と違い、噛み付かれたような跡が一切無い代わり、その胸に直径5cm位の穴がポツカリと空いていた。

「焦げていないから弾痕じゃあないみたいだが、一体何の跡だ？これは？」

「オレが知るか」

謎の死体からスミスが目を背けたその先に、もう一つ別の死体を見つけてしまった。

「おい、あっちにもあるぜ」

「済まないが調べてきてくれ。オレはもう少しこの死体を調べる」
「オレがか！？」

非難の声も聞かず黙々と死体の傷口を調べているレンに非難の視線を向けながら、スミスはさっきも使ったモップを片手に、なるべくゆっくりと死体に近寄った。

「動くなよ、ゾンビになつてんなよ」

そろりそろりと死体に近寄るが、ある程度近づくとその死体にも同様の血溜りを発見し、幾分動きを速めながら死体へと近寄った。

「レン！ちよつと来てくれ！」

「どうした？」

今度のそれは私服を着た若い男性の物だったが、その胴体には大きく斜めに切り裂かれた傷跡が有った。

「レン、お前通り魔でもやったか？」

「誰がやるか。それにこれは刀傷じゃない。もっと太い……斧とか鉞とか、もしくは……」

「もしくは？」

「巨大な獣の爪とか」

スミスの顔から完全に血の気が消え失せる。

もしそうだとしたら、少なくともこのラークンシティ周辺に棲む獣の物では有り得ない程、その爪痕は大きかった。

「冗談辞めてくれよ………」

「オレもそうだったらどんなに……」

カタン………

突然聞こえてきた物音に、二人が過敏に反応する。

「ゾンビかな……」

「もしくはこの連続殺人犯か……」

用心深くレンが周囲を見渡し、音の聞こえてきたらしい方向へと歩き始める。

その後が続いて体中を震わせながらモスバーグを握り締めたスミスが続く。

何者かに食い荒らされた形跡の有る生鮮食料品売り場を越え、事務所へと続くドアを開ける。

「おそらくこつちだと思うが……」

「そ、空耳だといいんだけど……」

お互いなるべく小さな声で声を掛けながら、先へと続く。やがて事務所からその先の更衣室の方へと進むが、物音の原因になりそうな物は見当たらない。

「や、やっぱり空み……」

カタン………

「……………」

今度ははっきりと聞こえた。スミスが声にならない悲鳴を上げる。レンはその音のした女子更衣室の方へとなるべく足音を立てないように進む。

女子更衣室の中を調べていく内に、レンは一つのロッカーの前で

立ち止まり、スミスへと指差す。よく見ると、そのロッカーは微かに音を立てて震えていた。

レンはクーガードを抜いてロッカーへと向けながら静かに刀を抜く。

スミスは唾を飲み込みながらモスバークをロッカーへと向けた。用心深く刃をロッカーの隙間へと差し込むと、レンは一気にロッカーを開けた。

スミスの指が一瞬トリガーを引こうとするが、寸前で止まり、ゆつくりとトリガーから外す。

「お願い……助けて……」

ロッカーの中には、ショッピングセンターの制服を着た少女がひざを抱えた状態で震えていた。

「大丈夫だ。一応人間だよ、オレ達は」

レンが声を掛けると、少女はゆつくりと顔を上げる。掛けていた眼鏡がずれ、涙でくしゃくしゃになった顔に二人は見覚えがあった。

「ミリイ？」

「レン!？」

「ミリイじゃないか!」

「スミスも!」

その少女がクラスメートのミリイことミリア・マクセルである事に二人が驚くのと、意外な人物がそこにいるのにミリイが驚くのは同時だった。

が、ミリイが驚いた表情をしたのはごく短い時間で、すぐに泣き顔になりながらロッカーから飛び出し、すぐ前にいたレンへと抱き

着いて大きな声で泣き始めた。

「あたし、あたし、ここでアルバイトしてて、忘れ物取りに来たら、何かみんな慌ててて、気が付いたら街のあちこちにゾンビがいて、あたし、みんなとここに隠れてて、気が付いたら妙に静かになっていて、様子を見に主任とトムさんが行ったんだけど帰ってこなくて残っていた人達が裏口から逃げようとして、みんな、みんなゾンビに襲われて、だからあたし、ずっと、ずっと……」

「大丈夫、もう大丈夫だ」

レンはクーガードをホルスターに収め、空いた左手でミリイの肩をやさしく叩きながらなだめる。やがて、ゆっくりと泣き声は小さくなっていった。

「ミリイ、オレ達と一緒にこの街を出よう」

「でも、外には……」

「安心しなつて、オレとレンの二人に掛ければゾンビの10匹、20匹どうって事ないって」

スミスが手の中のモスバークを見せ付けるようにしながら強がる。が、ミリイの表情は曇ったままだった。

「違うの！ゾンビじゃない何かがここにいるの！」

『！』

レンとスミスが顔を見合わせる。おそらく、その何かの餌食になったのがあの死体であろう事に二人同時に気付いたからだった。

「ミリイ、そいつはどんな奴だ？」

無意識に少し強く相手の肩を掴みながらのレンの問いに、ミリイは首を横に振った。

「分からない…………あたしずっと隠れてて音を聞いただけなの」
「音？」

ミリイは首を縦に振って続ける。

「うん。ヒタヒタ、ヒタヒタって何かが這い回る音……………」

スミスが冷や汗をかきつつ、唾を飲みこんでゆっくりと後ろを見た。レンも緊張しながら耳を澄ます。

少なくともここに来るまでにそういった音は二人は聞いていない。考えられるのは、ここからいなくなっただか、ただ彼らが聞いていないだけか…………

「どうやらここも安全じゃないみたいだ。早く出た方がいいだろう」
「さ、賛成…………」

スミスが開けっ放しになっていたドアへと近付こうとした時だった。

ヒタ…………ヒタ…………

遠くからだが、はつきりとその音は聞こえてきた。

三人の間に緊張が走る。その音は徐々にだが確実に近づいて来ていた。

スミスがまた唾を飲み込みながらモスバグを構える。

ミリイはレンにしがみついて震え、レンは彼女の肩を抱きながら用心深く備前長船を構えた。

ヒタ……ヒタ……

もはや音はかなり間近に聞こえて来ていたが、いまだその相手の姿は見えなかった。

ふと、レンはスミスのすぐ前に水滴が滴っているのに気が付いた。何気に視線を上に向け、その水滴が唾液である事に気付くまでは一瞬だった。

「上だスミス！」

「何っ！？」

上を向いた彼らの目に、奇怪な怪物が見えた。

人間位の大きさのそれは、全身を紅い体色で占め、四肢には巨大な爪の生えた手足が伸び、頭部は脳が露出し、目が無い代わりに無数の牙が生えた口から異様に長い舌が舌なめずりをしながらこちらを伺っていた。

「くたばれ！」

スミスが天井をポイントしながらモスバークを撃つが、散弾が届くより速く怪物は天井から落ちると、器用に床へと着地。散弾は虚しく天井に弾痕を刻んだ。

「くそっ！」

慌てたスミスが銃口を下へと向けながら次弾を装填しようとするが、それよりも怪物の舌が伸びてスミスの胸へと突き刺さる方が速かった。

「スミス！」

「きゃああああ！」

スミスは後方へと吹っ飛び、レンの斜め後ろのロッカーへと大きな音を立ててぶち当たる。

そちらを横目で見ながら、レンはミリィを自分の背後へと匿い、怪物へと向かって刀を八双に構えた。

怪物はスミスのいる方向へ向き直ると、また舌を伸ばしてきたが、それが伸びきるよりも速くレンがその舌を半ばから斬り落とす。

奇怪な咆哮を上げながら後退ろうとする怪物の横へとレンは回り込み、刀を逆手に持ち直すとその背中へと一気に突き刺し、床へと縫い止める。

「どけえ！レン！」

突然聞こえて来たスミスの声に従って、レンが刀から手を離して傍のロッカーへとへばり付いた瞬間、レッドホークから放たれた44マグナム弾が怪物の頭部を吹き飛ばした。

「ざまあみろってんだ、このカメレオン野郎……」

スミスが未だ硝煙を上げている銃口に一息吹くと、のろのろとした動作で立ち上がる。

「大丈夫？」

ミリィが心配そうに声を掛けるが、スミスは笑って胸の防弾チョッキを指差した。

「強化用金属板入りで助かったよ。ケプラーだけだったら今ごろ神

の御許に行ってる。すげえ痛かったけどな」

「高かったからな、それ」

レンが怪物の死体に足を掛けながら刀を引き抜く。

床に食い込んだ部分に刃こぼれが無いかを確かめると、鞘へと収めて改めて微かにケイレンしている怪物の死体へと近寄った。

「何なんだ、こいつは？」

「カメレオンのモンスターだろ」

「違うわ」

断言するスミスにミリィが異を唱えた。

「爬虫類にしては動きが柔軟過ぎる上に機敏過ぎるわ。それにこの舌も補食用じゃなくて狩猟用みたいだけど、爬虫類は自分より小型の獲物を狙う事が多いからこんな進化はしないわ」

「それじゃあこいつは一体？」

「多分……」

真っ青な顔で説明を続けようとしたミリィの体が、ビクッとケイレンする。

理由は聞かなくても原因ははつきりしていた。

また、あの這い寄る音が聞こえたからだ。先程よりも速く、しかも、複数……

「スミス、そっちを頼む」

「おうよ」

スミスがレッドホーク片手に振り向いて更衣室の奥の方を警戒する。

レンはクーガードをホルスターから抜いて出入り口を警戒した。
ロッカーの陰から巨大な爪が生えた腕が見えると同時にレンはクーガードのトリガーを連続して引く。

その内の数発は怪物へと当たるが、怪物は微かにひるんだ次の瞬間には大きく跳躍してその巨大な爪を振りかざした。

レンはとつさに背後へ身を引こうとするが、背後にミリイがいた事を思い出すと、僅かに身を反らして左腕で顔と首をガードした。爪が直撃した途端、鈍い破砕音を立てて砕け散ったプロテクターの破片と引き裂かれた袖、そして紅い飛沫が宙を舞った。

「いやああああ！」

「レン！」

レンの負傷に気付いたスミスがレンの手前に着地した怪物へと狙いを付けようとするが、ちょうど陰になっていて狙いが定まらない。その内に天井からもう一匹の怪物が這い寄るのが視界に飛び込み、そちらへと狙いを変える。

力の入らない左手からクーガードが滑り落ちる感触が伝わってくるが、それを拾いに行く事はレンには出来なかった。

すぐ目の前の怪物は何を思ったか床の上を滑るクーガードの方へと這い寄るが、すぐに興味を無くしたらしくレンの方へと向き直った。

（姿勢が低い……………居合い、斬撃共に使えない……………）

左腕の激痛を堪えながら、レンは刀を抜いて片手で構えながら怪物と対峙する。そのまま慎重に摺り足で間合いを計る。

（この状況で使えるとしたら、あれだけか……………）

こちらの様子を伺っている怪物への対処法を頭の中で巡らしていた時、偶然足が床へと落ちていたプロテクターの破片を踏んで小さな音を立てた。

途端、怪物は再び跳躍してレンの血が付着している爪を振りかざした。

（今だ！！）

怪物の体が刃の攻撃範囲に届くと同時に、レンは鋭い刺突を繰り出す。

それが相手の体に突き刺さると同時に踏み出した左足のつま先に体重をかけ、一瞬にしてまた手元へと強引に刃を戻し、次の瞬間に再び刃を突き出す。
連続。

怪物の体は瞬く間に穴だらけになっていき、その爪がレンへと届く頃にはその体からは完全に力が失われていた。

「光背一刀流、《烈光突》……………」

ぼそりとレンが技の名前を呟くのと、スミスがもう一匹の怪物にとどめの弾丸を撃ち込むのはほぼ同時だった。

怪物が完全に死んだのを見届けると、レンは背中からロッカーへと持たれかかり、そのまま崩れるように座り込んだ。

「レン！」

「おい！大丈夫か！」

「あんまり……………」

二人が慌てて駆け寄るが、レンの傷口から止めど無く流れている血を見ると言葉を失った。

ミリイが自分のロッカーからタオルを取り出して傷口へとあてがうが、瞬く間にそれは真っ赤に染まっていく。

「どうしよう、どうしよう」

「落ち着け、こういう時は止血して病院に…」

「街がこんな状態で開いている病院があるか」

狼狽しきっている二人に冷ややかな視線を向けながら、レンはどつすればいいかを考えた。

「スミス、ベルトを貸せ」

「は？」

「ミリイは何でもいい、厚めの本を探してきてくれ」

「何に使うの？」

「治療だよ」

訝しがっている二人をよそに、レンはスミスのベルトで上腕をきつく縛って止血すると、ミリイが自分のロッカーから持ってきた数冊の文庫小説を重ねると一番上の本の表紙をめくり、ページを一枚破って床へと置いた。

「どうするつもりだ？」

「いいから手伝え」

レンはベストのポケットから何発かの弾丸を取り出すと、弾頭を歯で挟んで外し、中の炸薬を紙の上へと撒けた。

「どつすんだよ、一体？」

訳が判らないながらもスミスもそれに協力して、同じように弾丸

から炸薬を抜き出す。

「血が止まらなけりゃ、出ないようにしてやりゃいい」

レンは一定量が紙の上に溜まると、傷口の血を拭ってその上へと振り掛けた。

「オレの銃を取ってくれ」

「おい、お前まさか……」

「多分当たりだ」

ミリィがクーガードを手渡すと、レンは腕を本の端に置いて、弾丸が腕を掠って本へと突き刺さるように銃口をポイントした。

「正気か！止める！」

「一応正気だ」

不敵な笑みを浮かべながらレンはクーガードのトリガーを引いた。発射された弾丸は傷口を覆っていた炸薬を一瞬にして着火させる。

「！！！」

「やりやがった……………」

歯を食いしばって痛みに耐えたレンに対し、驚きのあまり声も出ないミリィと啞然としているスミスの前で、炸薬はあっという間に燃え尽きる。

後には火傷によってほとんど血が出なくなった傷が残った。

「こいつで何とかなる」

激痛の為、顔を歪めているレンが左腕を持ち上げて軽く拳を握ったり開いたりする。

充分動く事を確認すると、そこに救急スプレーを吹きつけた。

「待つて」

その上から包帯を巻こうとするレンをミリィは止めると、窓際に置いてあった鉢植えのハーブの葉を千切って傷口の上へとあてがった。

「このハーブは傷や火傷によく効くし、鎮痛効果もあるの」

「そうか、済まない……」

「うっん、お礼を言わなきゃならないのはあたしの方。この傷、あたしを庇ったからでしょ」

包帯を巻きながら、ミリィは真摯な瞳でレンの方を見た。

「ありがとう。あたし一人だったら、もうとっくに死んでいた」

「気にするな。体が勝手に反応したただけだ」

「でも……」

「そ、それよりも、結局こいつ何なんだろうなあ」

その場に漂う自分だけが気まずい雰囲気、スミスが強引に話題を変えた。

「ええ、さっきの動きを見て確信したわ。そいつは多分肉食の哺乳類の変種だわ」

「へえ、そうなんだ」

白々しい返事を返すスミスを苦笑しながら、包帯を巻き終えた左

腕でクーガードの握り具合を再確認しながらレンが立ち上がる。

「そいつの右腕をしてみる。そいつが何の変種か分かるぞ」

「あ？何で腕を見て分かる……」

言葉の途中でスミスの目が驚愕に見開かれる。何事かと近寄ったミリイもそこにある物を見つけて愕然とした。

「そんな……」

怪物の右腕には、今にもちぎれんがばかりに伸びている金色のチエーンプレスレットが光っていた。

「じゃあこれ……」

「人間だった、てのか……」

呆然としている二人に、レンは短く頷いた。

「ずっと考えていた、どうしてこの街が急に化け物達であふれたか……こいつはオレの仮設だが、この街に生き物を変貌させる何かの要因が有って、その要因に触れた生物が何らかの変化を起こしてゾンビや怪物になるんじゃないのか？」

「ちよつと待てよ！その何かの要因って何だよ？軍が作った秘密兵器のガスか？それともブードゥーの儀式か？そんな事ある訳が……」

何かを考え込んでいたミリイが突然口を開き、論議していた二人の視線がミリイへと集中する。

「ウイルス進化説って学説が有るの。それによれば、脅威的な致死

性を持ったウイルスが生物に感染すると、ほとんどの生物は死滅するけど、それに耐性を持った生物、もしくは耐性を持つ為に進化した生物が生き残るって説なの。はつきりとは言えないけど、今の状況はこれに当てはまるような気がするの」

「それじゃあ伝染病だったのか!？」

「あくまで仮説としてよ。それに、市当局から出ていた奇病の感染者数からいって、おそらく空気感染ではなくて、何らかの媒介、水や微生物、小動物からの間接感染がもつとも有力だと思うわ」

「これから直接感染する可能性は？」

レンが左腕の包帯を差しながらの問いに、ミリイはしばし沈黙した。

「……………多分、大丈夫だと思うわ。負傷後すぐに高温及び薬品による消毒を行ったから、もしウイルスが原因だったとしても死滅しているはずよ」

「オレ達がそのウイルスに感染する可能性は？」

ミリイは無言で首を横に振った。

「分からない……………そもそも本当にウイルスが原因なのかすらも特定出来ない状況じゃとても……………」

「頼むよ！オレは死ぬのもゾンビになるのもゴメンだ！」

スミスがミリイの肩を揺さぶるのを、レンが止める。しばらくそのまま不気味な沈黙だけがその場を支配した。

「とにかく、ここで考えてても何も解決しない。今はこの街から生きて脱出する事だけを考えよう」

「……………うん……………」

「ああ」

レンの言葉に、残る二人が小さく答えた。

「取り合えず、腹ごしらえでもしよう」
『え?』

続くレンの言葉に二人は同時に疑問符を浮かべた。

「腹ごしらえって……」

「よく考えたら朝から何も食ってなかったからな。幸いここには大量に食料があるから、必要な分だけ拝借していくとしよう」

「でも外にはゾンビが……」

「切りぬけてやるさ。この備前長船に賭けて」

レンは刀を持ち上げながら挑戦的な笑みを浮かべた。

店内に戻った所で、そこに転がっている死体を見たミリイが小さな悲鳴を上げる。

「主任……」

「見ない方がいい」

レンが彼女の視界を閉ざすように前へと立つと、スミスに目配せする。

その意図を察したスミスが手近の被服エリアから適当な服を取ると、死体の上に掛けた。

「向こうも頼む」

「お、おう」

しがみ付いて震えだしたミリィをなだめながら、レンはもう一つの死体の方を顎で示す。

「この先、こんなのは幾らでも転がっている。慣れるとは言わないが、覚悟はしておけ」

レンの言葉に、ミリィは震えながらも小さく頷く。

「おわっ！？」

その時、スミスが妙な悲鳴を上げた。

レンがそちらを見ると、そこには胸を切り裂かれて絶命していたはずの死体が、ゆっくりと起き上がる所だった。

「トムさん！？」

「違う！あれはもう人間じゃない！」

レンがミリィを背後に匿いながら刀に手を掛ける。

が、それよりも早くスミスが至近距離から散弾を撃ち込み、その上半身を四散させた。

「ひっ！？」

その光景を目の当たりにしたミリィが悲鳴を上げながらその場へたり込む。

「あ……ああ………」

あまりのショックに、ミリイは言葉を失いケイレンするような声を出しながら嗚咽を漏らす。

「これが今のこの街の状況だ。例えば知人を見かけても……」
「ひいっ！」

レンの言葉の途中で、ミリイが悲鳴を上げる。何時の間にか、その足首を土気色をした腕が掴んでいた。

「い、いやあつー!!」

それが、先程隠した死体から伸びている事に気付いたミリイが錯乱しながら足を振るう。

が、動き出した死体はミリイの足首を掴んだまま、ゆっくりと這い寄ってくる。

レンは無言で刀を素早く抜くと、ゾンビの首筋へと突き刺した。ゾンビは短くケイレンすると、掴んでいた手を離し、再び死体へと戻る。

レンは刀を振るって鞘に収めると、ミリイの肩に優しく手を掛けた。

「ショックかもしれないが、受け入れろ。もしくは忘れるんだ。でなければ持たないぞ」

「でも……」

小さく嗚咽しているミリイに、レンが半ば冷徹な声で言葉を続ける。

「余計な事を考えている暇は無い。生き残る事だけを考える。それが嫌なら何時までも泣いている事だな」

「おい、そんな言い方は…」

さすがに見かねたスミスが忠告するが、レンはそれを制して後を続ける。

「どんな時も生き残るのは意志が強い人間だ。“運に頼るな、自分の力で掴み取れ”、オレは剣の師匠からそう教えられた」

「……………うん……………」

しばらくの沈黙の後、ミリイは小さく頷いた。

「取り合えず、着替えた方がいいぞ」
「え？」

レンの言葉に、ミリイは改めて自分の状態を見た。
そして、初めて自分が座り込んでいた床に小さな湯気を立てる水溜りが出来ている事に気付いた。

「馬鹿っ！」

ミリイは赤面しながら傍の陳列棚からヘアスプレーの缶を取るとレンへと投げ付けた。

缶はちょうど向こうを向いたレンの後頭部へと命中した。

「なるべく缶かビン、それにここで作られた物以外の物しか口にしない方がいいぞ」

レンが後頭部を保冷材で冷やししながら、失敬したコンビーフ缶を咀嚼する。

「さもないけどな」

スミスが缶詰のフルーツを缶ジュースで流し込みながらぼやく。
そこで、着替えてきたミリイが目の前にカロリー食品を置いたまま、手を付けていない事にレンは気付く。

「無理にでも食っておいた方がいい。食事を取ると取らないのでは行動出来る範囲が違ってくる」

「……………うん」

ミリイはカロリー食品の封を破ると、強引にそれを口に入れて咀嚼し、缶ジュースで流し込んだ。

「食ったはいいが、吐かない程度で抑えておけ。無駄になる。あくまで必要量を食う程度に」

「どれ位だそれは」

「個人差だな。腹ごしらえが済んだら、必要な物を失敬してすぐに出るぞ」

レンが食べ終えた缶詰を律儀に店内のゴミ箱に投げ捨てながら立ち上がる。

「立派な万引きだよな、これって……………」

ゾンビの血と腐肉で汚れていたズボンをちゃっかり店内の物で着替えたスミスが食料やら何やらを物色しながらぼそりと呟く。

「非常時だ。請求されたら後払いで払う。もっともゾンビに請求されたら別だけどな」

「笑えないぞ、それは……………」

スミスがげんりした顔でレンを見る。

ふと、ミリイがゾンビ化してレン達に倒された同僚達の死体に、生花エリアから持ってきた花を捧げているのが見えた。

十字を切つて黙祷を捧げているのを見たスミスが言葉を掛けようとするが、思い留まつて無言でその場を離れた。

「飲み物と食い物、あと何が必要だ？」

「そうだな、薬の類でも…」

「それはあたしが持つから」

少し青い顔をしながらも、ショックから立ち直つたらしいミリイが小さなナップサックにアウトドア用品や地図、生花エリアの鉢植えから取ってきた治療用のハーブ等を押し込んでいく。

「必要最小限にしておけ。かさ張ると荷物になるだけだぞ」

「うん、分かった」

荷物をまとめたミリイがナップサックを背負うと、準備は整った。

「さて、ここからどう行く？」

「外にゾンビ連中がいなきやいいんだが……………」

「あたしに考えがあるわ。こっちに来て」

ミリイの後に続いて、三人は事務所を抜け、外の従業員駐車場へと出る。

「フェンスの向こうに何匹か居やがるな」

「ドアを開けるのも出来ない連中だから、こっちに来る事は出来ない

いだろう」

フェンスの向こうからこちらを見ているゾンビ達に多少驚きながらも、ミリイは足元を指差す。

「ここなら安全だと思うの」
「なるほどな」

そこには下水道に続くマンホールが有った。

「何か開けるの取ってくる」

スミスが小走りに店内に戻り、すぐにバールを手にしてくと、マンホールのフタにそれを掛け、力を込める。

「せーの」

金属とコンクリートが擦れる重々しい音を立てながら、フタが横にずれる。

「おーし、開い…」

マンホールのフタを横に置こうとしたスミスが、フェンスの横からこちらに向かってくるゾンビに気付いて仰天する。

「やばい、回り道するぐらいの知恵が残ってやがった！」
「ウソ！」
「急げ！」

三人は慌ててマンホールの中に入ると、フタにバールを引っ掛け

て内側から閉めた。

その先に、何が待っているかも知らずに……………

SWORD REQUIEM Vol.4

第三章

「うゝ、くせえ……………」

「言っな」

下水道の内部へと降り立った三人はその悪臭に顔をしかめながら、周囲を見渡す。

「まさか、さっきの連中入ってこねえだろうな？」

「フェンスのドアの開け方すら分らないみたいだから、大丈夫だと思っけど……………」

先程閉めたマンホールから響いてくる足音を不安そうに聞きながらも、ミリイがナップサックから地図やコンパスを取り出して一緒に取り出したライトで照らし出す。

「現在地がここで、確か下水道はストリート沿いに主配管が埋設されてるって聞いた事があるから、そっちの方に進めばいいはずよ」

「下水道の配管図があれば一番よかったんだが……………」

「下水道のどこかに管理室があるはずだから、そこに行けば有るかもしれないけど……………」

「行ってみりゃ分かるだろ」

「そうだな」

膝下まで来る汚水を気にしつつも、三人はミリイの指差した方向へと歩き出した。

「ブーツでも履いてくりゃよかったか？これは」

「ここまで深かったら意味無いと思うぞ」

「キヤツ！何か変なの踏んだ！」

「気にするな。オレも踏んでる」

「今妙なのが流れてったぞ……………」

「人形だろ」

先頭をミリイから受け取ったライトをタクティカルスーツの肩に付けたレンが進み、その後ろをミリイ、最後尾にスミスが並んで、しばらく下水を進んだ時だった。

「妙だな……………」

「何が？」

「静か過ぎる」

「そういえば、下水には大抵小動物が住み着いているはずなんだけど、全然姿を見かけないし……………」

「それって……………」

「何かいる、かもな」

「脅かすなよ……………おい」

「脅しじゃすまないみたいだな……………」

レンが前方を鋭い目付きで見ながら、腰の刀に手を掛ける。

その時になつて、スミスも気付いた。

前方から聞こえてくる呻き声に。

「まさか！？」

「先客がいたようだな」

スミスが驚きながらも、モスバークのセーフティを外す。

ライトの照らし出す光芒に、こちらへと近付いてくる複数のゾン

ビが飛び込んできた。

「ここにも!？」

「安全地帯は無いって事か！」

レンが一步踏み込みながら刀を抜こうとした時、その足が水面下の何かを踏み付ける。

「しまっ…！」

バランスを崩したレンは何とか転倒を逃れたが、すでにゾンビは間近へと迫っていた。

「避ける！」

スミスが叫びながらモスバークのトリガーを引いた。

レンがとつさに壁に張り付き、その目前を連続して発射された散弾が通り過ぎる。

下水道の内部に銃声が木霊して響き渡り、それが途絶えた時にはゾンビ達は本物の死体となって下水に浮かんでいた。

「ありがとう、助かった」

「ドジったか？危ない所だったぞ」

スミスが使った分の弾丸を補充しながら、物珍しそうな顔でレンを見た。

「考えてしかるべきだったな。こんな所じゃ踏み込みが効かない事を」

レンがつま先で先程踏んだ物、スナック菓子か何かの袋を持ち上げながらぼやく。

「それって、カタナが使えないって事？」

「使えない訳じゃない。だが、オレの技量じゃこんな場所じゃ自在に戦えないって事は確かだ」

「おい、冗談はよしてくれよ。この中じゃお前が一番強いってのに……………」

「謙遜だな。オレは剣術の心得が有るだけの高校生だ。それに踏み込みが効かないなら効かないなりの戦い方が…」

言葉の途中で、レンがふと視界の片隅を何かが通り過ぎた事に気付く。

「何だ？」

スミスもそれに気付いたらしく、その何かを目で追い、流されつつあるゾンビの死体へと視線を向けた。

「え？」

「な!？」

それは、全長が30cm以上はある巨大なゴキブリだった。

一匹が死体へと張り付くと、それを見計らったかのように下水のあちこちから同じような巨大なゴキブリが現れる。

「く、来るな！オレは足が多いのは嫌いなんだ！」

スミスが足にすがってきた巨大ゴキブリを払い除けるが、巨大ゴキブリ達は次々とこちらに近寄ってくる。

「！こいつらもさっきの奴と同じ変異体か！？」
「い、いやああああ！！！」

ミリイが恐怖と嫌悪の入り混じった悲鳴を上げたのを合図に、三人は一斉にその場から逃げ出した。

「ゾンビに食われるのも嫌だが、ゴキブリに食われるのはもっとゴメンだ！」

「いやああ！ゴキブリきらい！！！」
「好きな奴なんて滅多にいるか！」

ある者は壁を走り、ある者は宙を飛びながら追いつこうとしてくる巨大ゴキブリ達から何とか距離を取ろうと走り続ける三人の前に、一つの頑丈そうな扉が飛び込んできた。

「あの中に逃げるぞ！」
「またこのパターンか！」

もつれるように三人は扉をくぐると、大慌てで閉める。

「は、入ってこないよね……………」
「あいつらに聞いてくれ」

扉の傍に隙間や通気口の類が無いのを確かめたレンが改めて入った部屋を見渡した。

「どうやら、管理室ってのはここみたいだな」
「そうか……………」

疲れきった声を出しながら、座り込んでいたスミスがのろろと立ち上がる。

「で、地図なんてあるか？」

「棚とか引き出しとかの中に有るだろ」

レンが率先してガラス張りの戸棚を開けようとして、カギが掛かっているのに気付くとためらいも無く刀の柄でガラスを叩き割る。

「……………なんか手馴れてきてないか？」

「気のせいだ」

「まあ、こういう状況じゃ仕方ないが……………」

スミスの疑わしげな視線を受け流しながら、戸棚の中のファイルをあれこれ調べ始めたレンをミリイも手伝う。

「これか？」

「間違いないわ」

ファイルの中から地図を見つけ出したレンがそれをミリイに手渡すと、ミリイはそれを部屋の中央に置いてあるテーブルの上に広げ、持ってきた地図と照らし合わせる。

「現在地がここだから、西から街を出るにはまずここから南に進んで主下水路と合流、そこから西に進んでこのマンホールから外に出る事になるわね」

「オレン家のすぐ傍だな」

地図と照らし合わせながら、ミリイが進むべきルートを指でたどっていく。

「それならかえって好都合だ。どこかで弾丸を補充したかった所だしな」

ルートを確認したレンが賛同すると、三人は無言で頷き合う。

「日が暮れる前に下水から出た方がいいだろう。すぐに出発しよう」
「出発するのはいいが……………大丈夫か？カタナが使えないんじゃない？」
「…」

「なんとかする」

無愛想に答えながらレンはドアノブを掴み、用心深く開いて周囲を確認する。

「大丈夫だ。行こう」

「うん」

「OK」

入ってきた時と同じ順番で並んだ三人が、周囲を警戒しながら汚水の中を進む。

途中ぬかるみに足を取られそうになりながらもしばらく進んだ時だった。

「何だあれは？」

最初、それはライトに照らし出される白い塊にしか見えなかった。

「クモの巣……………じゃ……………」

スミスの言葉は、それに近付いていくと小さくなっていった。

その巨大なクモの巣のような物の中に明らかに何かが入っている事に気付いたからだった。

「まさか……………」

レンが刀を鞘から抜くと、慎重にそのクモの巣を斬り開く。

「ひっ！」

「うわ……………」

その中身を見たスミスとミリイが悲鳴を漏らす。

そこからは、苦悶の表情を浮かべた状態で半ばミイラ化した人間の死体が入っていた。

「……………こいつもさつきみたいな変異体にやられた、と見るべきか？」

「…………間違いないわ。この状態から見て、神経毒の類で動けなくして、糸で逃げられなくした後に体液をすられた。クモの捕食パターンに当てはまるわ」

「ちよつと待てよ！人間を襲うなんて、一体どれ位の……」
「！」

スミスの言葉の途中で、微かに聞こえた物音にレンが素早くホルスターに手を伸ばしながら振り向く。

「な！？……………」

慌ててレンの向いた方向にモスバークを向けたスミスが、その視線の先にいた物を見て絶句する。

そこには、全長が2mはある、とんでもなく巨大なクモが天井に

張り付いていた。

「こいつか！」

レンがホルスターから抜いたクーガードを巨大グモに素早くポイントすると連続してトリガーを引いた。

放たれた弾丸が巨大グモの体にめり込むと、巨大グモは天井から離れ、レンのすぐ目の前へと落ちてきた。

「くっ……」

落下の衝撃で跳ね上がった汚水で一瞬視界を塞がれたレンが怯んで後ずさる。

その隙に巨大グモは弾痕から体液を垂れ流しながらも、上体を起こして口から液体状の何かをレン達に吹き付けてくる。

「何だ！？」

「きゃっ！」

「おわっ！」

膝近くまである汚水に足を取られながらも三人はなんとかそれかわす。

放物線を描いて水面へと落ちた謎の液体は、そこで異臭を放ちながら水面に泡を立てて汚水に紛れて流れていく。

「気を付けて！多分神経毒混じりの消化液よ！」

「食らえ！」

ミリィの忠告を聞きながら、レンはクーガードを巨大グモの頭部へ向けてトリガーを引いた。

至近距離から撃ち込まれた9ミリパラベラム弾がコイン程の大きさがある巨大グモの複眼をえぐり、弾き飛ばす。

肉片と体液を撒き散らしながらも、巨大グモはレンへと襲い掛かろうとしたが、レンは連続して弾丸を巨大グモの頭部に撃ち込み、やがて巨大グモはケイレンしながら仰向けに転がり、絶命する。

「……………やったか？」

「油断するな、さっきから他の奴を見掛けない。おそらくはこいつ一匹だけじゃないぞ」

「レン！向こう！」

ミリィが指差した先から新たな巨大グモが一匹、そして横手から合流していた水路から一回り小さな、それでも全長1mはある巨大グモが天井へと這い出す。

「この野郎！」

スミスが小さい方の巨大グモへと向けてモスバーグのトリガーを引くが、予想以上に速いその動きに散弾は天井に虚しく弾痕を刻む。

「そっちは頼む！」

レンは向こう側から現れた巨大グモへと向けてクーガードを連射するが、残弾の少なくなっていた銃は即座に弾丸が尽きる。

「くそっ！」

レンは抜いたままになっていた刀を構えるが、膝まである水位とぬめる靴底から斬撃に必要な踏み込みは大きく奪われていた。

（どうする？この状態では居合も刺突も使えない。だが、弾丸を装

填している暇も無い……………)

「こなくそっ！」

向こうでは真上から落ちてきた毒液をかわしながら、スミスがレツドホークを抜くのが見えた。

横目でそちらを見ながら、こちらへと向けて巨大グモが噴き出した毒液をかわそうとしたレンが何かに足を取られて汚水の中へと後ろ向きに転倒する。

「レン！」

「下がっている！」

近寄って助け起こそうとしたミリィに怒鳴り返しながらも、レンは立ち上がろうとした時、その両手に武器を握り締めたまま手放さなかった事を気付く。

(これだ！)

レンはクーガードをホルスターに仕舞うと、立ち上がって素早く巨大グモの背後に回りこむと、突然その背中から抱きついた。

「おおおおお！」

左腕で巨大グモの体を羽交い絞めになると、雄叫びを上げながらその胴体に刀を真横から突き刺した。

激痛の為か巨大グモは激しく暴れるが、レンは必死にその体にしがみ付きながら刃を捻り、鰐元からせり上げるようにして巨大グモの胴体を斬り裂く。

力を失った巨大グモの死体が水面に浮かび上がり、その隣にマグ

ナム弾特有の大きな弾痕が穿たれたもう一匹の死体が天井から落ちてくる。

「大丈夫か？」

上に向けていたレッドホークを降ろしながらスミスが心配そうに聞いてくる。

「なんとか、な」

全身汚水まみれになったレンが苦笑しながら立ち上がり、刀を振るって鞘へと収める。

「ホントに大丈夫？傷口から毒が入った可能性も……………」

「体液はほとんど浴びちゃいない。大丈夫だろ」

心配そうに聞いてくるミリィに微笑しながら、レンはホルスターからクーガードを取り出すとマガジンを抜いて弾丸を装填していく。

「幾らかタナが使えないからって、これに抱き着いた方がオレには信じられないけどな」

「他に手が思いつかなかったんだ」

使った分の弾丸を装填しながら、スミス呆れ顔でレンを見る。

「とにかく、もうすぐすれば主水路に合流するわ。そこからは歩道があるはずだからこれ以上汚れずに済むわ」

「そいつはありがたい」

地図を確認したミリィがチラリと横目で全身汚水まみれになってい

るレンを見る。

レンは大して気にした風も無く、マガジンをクーガードに戻すと初弾を装弾してホルスターに戻した。

「これ以上化け物がいなけりやいいんだがな」

「さあな」

その時、先に進もうとした三人の耳に、遠くから何かの雄叫びのような物が届いた。

「何？今の……………」

「クモでもゾンビでもカメレオン男でもねえぞ、ありや……………」

「どうやら、平穩には進めないようだな」

レンは、緊張した顔で行く手に広がる闇を見据えた。

異臭が漂う下水道の大きなトンネルの中を、そいつは歩いていった。そいつの頭の中には、明確でそれでいて唯一の思考のみが存在し、それだけの為に存在していると言っても過言では無かった。

そいつの目の前に、一体のゾンビが現れた。こちらに気付いて近付いて来るそれを、そいつは唯一の目的である“同種の繁栄”の為の苗床として不適當と判断すると、巨大な拳を振り上げた。

鈍い打撃音が響いた後、そいつはその場を離れた。後には、原形を留めぬ程にグシャグシャになったゾンビの屍が転がっていた。

そいつが下水道の合流トンネルに入った時だった。その異様に赤い目に、トンネルの両脇にある歩道を歩く三人の人間の姿が写った。その三人はそいつの姿を見つけると、口々に何かを言っていたが、そいつにはどうでもいい事だった。

目の前にいる若い人間三人を種の為の苗床として適していると判

断したそいつは、ゆつくりと彼らに近付き、その黒く変色した右腕を彼らに向けて種の幼体を放出した。

が、相手の口から進入してその体内を苗床とするはずの幼体は、彼らのすぐ手前で何故か二つに両断されて下水へと落ちた。

何が起きたのかそいつには理解出来なかった。気が付くと、一番前にいる人間が何時の間にか細長い物を手にしている。

それが何であつたかは知性の失われたそいつの頭脳では考えられなかったが、目の前にいる人間が、危険な存在である事は理解出来た。

目的を先頭にいる人間の殲滅へと変更したそいつは、巨大な拳を振り上げて彼へと振り下ろすが、その拳は彼が先程までいたはずの歩道の床を砕いただけだった。

そいつの攻撃を後ろへと跳び退つて避けた彼が、手にした細長い物を構えた。

それと同時に、一番後ろにいた人間がそいつへと向けて立て続けに発砲。

弾丸はそいつの肩と腹を大きくえぐる。

そいつがひるんだ一瞬の隙を突いて、先頭にいた人間がその細長い物を振り下ろした。

その一撃で右肩を大きく切り裂かれたそいつに向けて、一番後ろにいた人間が更に駄目押しの弾丸を叩き込む。

そいつはその体になつて以来の激痛に巨大な咆哮を上げる。

それに驚いた中央にいた人間が短い悲鳴を上げるが、他の二人は油断無く武器を構えたままだった。

目の前にいる人間達が生命に関わる程の危険性を有している、とそいつは判断すると、一瞬にして、彼らがいたのとは反対の歩道に飛び移り、そのまま逃走した。

そいつの姿が見えなくなつてから、彼らはようやく構えていた武器を降ろした。

「な、何だっただ、今の……………」

今まで見た事の無い化け物と戦った緊張から解かれたスミスが脱力しながら呟いた。

「分かんない……………人間ベースではあったみただけど……………」

同じく緊張が解けて脱力しながらミリイが呟いた。

「何でもいいさ、逃げたからにはな」

刀を鞘に収めながらレンが言った言葉に反論できる程の余力は二人に残っていなかった。

「方向は合っているのか？」

「多分……………合っているはずだけど」

ミリイが方位磁針と地図を交互に見る。その針は少し西からはずれている事を示していた。

「とにかくこっから出ようぜ。二度とあの化け物と出会うのはゴメンだ」

「確かにな。あいつはゾンビよりもヤバそうだ。あの体格だったらマンホールからは出られないだろう」

その場から離れようと歩き出したミリイがふと何かが落ちているのに気付いてそれを拾った。

見てみると、それはインシヤル入りのネクタイピンだった。

「おい行くぞ」

「あ、待って」

特に気にも止めずにミリィはそれを投げ捨てた。それにはW・バ
ーキンと掘り込まれていた。

第四章

夜の帳が下りてき始めた街の一角で、ゴトリと鈍い音を立てて一つのマンホールのフタが開かれる。

そこからクーガードを左右へと向けながら、一人の少年が出て来た。

周囲にゾンビがいないのを充分に確かめると、少年はマンホールの中へと声を掛けた。そこから次にメガネを架けた少女が、最後に肩からスリングでモスバークを吊るした少年が出て来る。

全員が出て来て一番最初にしたのは、肺に残っていた下水の空気を全部吐き出す事だった。

下水の臭気が混じった空気を残らず吐き出すと、レンは周囲を見回して顔をしかめた。

「まずいな」

「何がだよ」

「もつじき日が暮れる」

「それがどうした？」

「夜間射撃に自信は有るか？」

言われたスミスが言葉に詰まる。

軍隊でもない限り、普通夜間射撃訓練なぞ行わない。ましてや民間人ではなお更だった。

「街灯を頼りに大体の見当を付けて散弾撃ち込めば……………」

「生存者と間違えたらどうする。それに予測で撃てる程弾丸の余裕は在るのか？」

スミスがポケットから残っている弾丸を全て出して数え始め、改めてその少なさに絶句した。

「散弾が込めてるのも含めて12発、マグナムが23発……」
「オレはあと30発つてとこだ」

レンとスミスが無言でお互いを凝視した。二人の顔を交互に見たミリイが不安げな声で聞いてくる。

「それって……」
「どう考えても足りないだろうな」

レンのいともあっさりとした返答にミリイが息を飲んだ。

「それじゃあ……」
「いや、ここからだったらオレン家まですぐそこだ。店に有るのを
かっぱらってこよう」

ミリイの不安げな声をスミスが打ち消すが、そのスミスの声も何処か不安げな色を含んでいた。

「親父、生きてるかな……」
「そう簡単に死ぬ人じゃないとは思うがな」
「もしゾンビになっていたら……」
「その時はお前の手を煩わせたりしないさ」

そう言いながらレンが腰の刀を鳴らす。それを見て何かを言おうとしたスミスの視界の隅に、街灯に映し出された長い人影が写った。

「誰だ！」

レッドホークをそちらに向けながらのスミスの声に人影は答えず、ゆっくりとこちらへと近付いて来た。しかも徐々にその数は増えていく。

もはやその人影がゾンビで有る事が疑い様も無くなる頃には、道路のあちこちからゾンビ達がこちらへと姿を見せ始めた。

「言ってる傍からこれか！」

「走るぞ！」

レッドホークとクーガードを乱射しながら三人はその場から逃げ出した。

カチン。

「チッ！」

後退したまま止まったスライドがクーガードの最後の弾丸が尽きた事を知らせる。

レンは右手にいたゾンビを斬り捨てながらそちらへ刃を向けようとするが、もはや刀で斬るには近過ぎる距離にまでそのゾンビは迫っていた。

とつさにレンは持っていたクーガードを上へと放り投げると、力強く握った拳をそのゾンビの顔面へと叩き付けた。

金属粉入りのグローブから鼻骨のひしゃげる感触が伝わり、僅かにゾンビが後ろに下がる。

その隙を逃さず、レンは相手の首へと水平に刃を突き刺し、そのまま横へと薙いだ。

ゆっくりと倒れていくゾンビを見ながら、回転しながら落ちてき

たクーガードを器用に受け止める。

「クイックドロウなんて何時覚えたんだ？」

そちら側から迫って来ていたゾンビの相手をしていたはずのスミスが何時の間にかこちらを見ていた。

どうやら今のが最後の一体だったらしい。

「ミカエルフェスティバルのパーティの隠し芸に使おうと思って覚えただがな、無駄になった」

「転校してきた時みたいイアイヌキでもやってみせればいいんじゃないか？」

「あの後しばらくあちこちのパーティで余興として呼ばれまくったからな。またピエロになるのはゴメンだ」

「みんなして、面白がってたものね」

レンは苦笑しながら受け止めたクーガードのスライドを戻すと、ホルスターへと戻し、刀を一振りして同じく鞘へと収めた。

「こんなに苦労して家に帰ったのは小学校の時に駄々こねて親父にRマートに置き去りにされて以来だ」

妙に疲れた声を出しながら、スミスがすぐ傍に有った自分の家の玄関へと向かう。

玄関のドアを開けようとしてカギが掛かっているのに気付くと、ポケットをまさぐってカギを探すが、幾つかのポケットを探した後、不意に硬直した。

「やべえ……………」

「どうした？」

「カギお前ん家に忘れてきた……………」

それを聞いたレンとミリイが深い溜息を漏らす。

「大声で親父に開けてもらえば何とか……………」

「その声聞いてまたゾンビ連中が集まってきたらどうする」

レンの指摘にスミスの顔がまた硬直する。

どうするべきかを必死に考えるが、いいアイデアが浮かばないでいると、ふとミリイが玄関へと近寄った。

「ちょっと見せて」

「何する気だ？」

スミスに代わってミリイが玄関のドアへと近寄るとライトで鍵穴を覗き込んだ。

「ここがこうなって、そっちがこうなっているんだから、あそこをこうかしら？」

持ってきたアウトドアグッズの中から取り出した工具でミリイがしばらく鍵穴をいじると、カチリと音を立ててカギが開く。

「開いたわよ」

「……………妙な特技持つてる優等生だな」
「確かに」

「こういうのは仕組みさえ解れば何とかなるんだけど」

変な所を感じている二人に多少困惑した視線を向けながら、ミリイはドアを開けて中に一歩踏み込んだ。

途端、その鼻先に銃口が突き付けられる。

「誰だ」

「あ、あの、あたしは…」

レミントンM1100Pショットガンの銃口を突き付けながら
誰何する中年男性にミリィがしどろもどろになっていると、その脇
からスミスがその男性へと近付き声を掛ける。

「ただいま親父」

「スミス生きてたのか！」

「店長も無事みたいで」

「レンも一緒か！」

目の前の少女が息子達の知り合いらしい事を察した男性、ケンド
銃砲店店長ロバート・ケンドは向けていた銃口を降ろした。

「取り合えずとっと中に入りな。ゾンビが入って来ちまう」

「お邪魔いたします」

銃口を降ろされてほっと一息ついたミリィが中に入った後、レン
がドアを閉めて元通りにカギを閉めた。

「取り合えず何をしてきたのか知らんがシャワーを浴びろ、臭うぞ」
「下水の中を通って来たものでしてね」

レンが苦笑して自分の状態を見る。

三人共同体からは異臭がしたが、特に下水内で転倒したレンは全身
から異様な臭いが漂っていた。

「話はその後だ」

ノズルから噴き出してくる熱い液体を頭から被りながら、レンは今まで有った事をぼんやりと思い出していた。

街中を覆い尽くしたゾンビ、全滅していく警官隊、生き残る為の戦いの決意、初めて自分の意志で元とはいえ人間を斬った事、目の前で死んでいった警官や狂気に陥っていた女性、未熟ながらも使わざるを得なかった剣技、ロッカーで震えていたミリイを助け出した事、奇怪な変化を遂げたゾンビとはまた違う変異体、未熟さ故に招いた負傷、下水の中での無様な戦い……………

体を洗う事も忘れ、レンは排水溝へと流れていくお湯を眺める。

（光背一刀流の剣は猛々しき激流にして、明鏡なる止水）

剣術を習う時、一番最初に教えられた言葉をレンは思い出していた。

（激流にして止水、か……………だとしたら、オレの剣はせいぜいこのシャワー位の物でしかないのか？）

自分の戦い様と師匠である伯父や光背一刀流正統後継者の従兄の剣を脳裏で比べれば、その差は雲泥と言っても過言ではなかった。

（もっとオレに力が有れば、あるいは……………）

濡らさないように気をつけながら、左腕に巻かれた体液の滲み出してきている包帯を見る。それこそが、自分の未熟さの現れその物のようないきがしていた。

「着替えここに置いておくね」

「……ああ」

ガラス越しに響いてきたミリイの声に、レンは我に返る。

「おゝい、まだか？早くしてくれ」

順番的に最後になったスミスが情けない声でぼやいてくる。

「もう少し待つてろ。今出る」

レンは思考を止めると、スポンジとボディソープを手にした。

（今はただ、生き残る事を考えよう）

体を洗いながら、レンは自らにそう言い聞かせた。

「で、話を聞こうか」

全員がシャワーを浴びて着替えた所で、ロバートは居間に全員を集めた。

外からでは分からなかったが、よく見ると家の窓という窓が全て家具や板で塞がれていた。

ソファアースら使っている為、居間の床にロバートが直に腰掛けると、他の三人もそれに習った。

「まず、この子は誰だ？」

「クラスメートのミリア・マクセル。隠れて震えていたところを見つけてここまで連れて来た」

「ミリイです、初めまして」

レンの説明の後にミリイが挨拶をしながら頭を下げる。

「スミスの父親のロバートだ。ま、よろしく」

短く自己紹介をしながらロバートが差し出した手をミリイが一応握り返し、短い握手をするとその手を離れた。

「街の様子はどうか？」

「どうもこうもねえよ、街中化け物だらけだ。ゾンビだけじゃねえ、ゾンビ犬だの狂暴なカラスだのカメレオン男だの大蜘蛛だのホラー映画顔負けの状態だよ」

スミスの返答にロバートが難しい顔をしながら唸る。

「何とかここまで生きて辿り着いたんですけど、もう弾丸が無いらしくて、出来れば譲っていただきたいんですけど」

「いいだろ、親父。弾なんて売る位あるんだからよ」

軽く言つてのける息子に一瞥をくれながら、ロバートはポケットからキーホルダーを取り出して投げた。

「そんなチャチな銃よりもいいのが倉庫に幾つか有る。好きな持つてきな。代金は後払いにしようとしてやるよ」

「ありがとうございます」

「すみません」

「ありがとよ、親父」

「お前のは小遣いから差っ引く」

「そりゃ無いぜ親父い………」

スミスの悲哀が空しく部屋に響いた。

幾つものカギが掛かった嚴重な扉を開け、レン、スミス、ミリイの三人は倉庫の中へと入った。

「こいつだこいつ」

スミスが一つのライフルケースを手に取りそれを開ける。中には一丁のスナイパーライフルが入っていた。

「ルガーM77マーク2？どつからこんなのを？」

「親父がSTARSの人に頼まれてカスタムした奴の一つさ。他にも有ったんだが後はほとんど納入しちまって遅れたこいつが残った」

驚くレンに説明しながらスミスが真剣な表情で照準を覗き込む。

本来ならば長距離用にスコープが付いているはずの場所には代わりに短・中距離用のレーザーポインター付きのダットサイトが取り付けられ、装弾数増量の為のマガジンが伸びていた。

「レン、その棚から弾取ってくれ」

スミスの指差した方向に有った弾丸ケースを手に取ったレンが、その箱に書かれた表示を見て目を丸くした。

「徹甲焼夷弾！？どつからこんな物騒な代物を……………」

「オレが知るか、親父に聞け。STARSの人達も何考えてこんなモン頼んだんだか」

スミスが呆れたような声を出しながら、M77マーク2の隣に置いてあったガンケースをレンへと手渡した。

「こいつは？」

「同じくSTARSの人達からの注文さ」

レンが手渡されたガンケースを開けると、そこにはグリップに星を意匠化したマークの入った銃が収められていた。

「ベレッタM92Fカスタム“サムライエッジ”。オレの伯父さんが持てる限りの技術をぶち込んで改造した傑作だよ。人数分作ったらしいんだが、何でか一丁余った」

レンはサムライエッジをケースから取り出し、手に取ると構えてみる。

微妙な握り具合を確認めると、装弾しない状態でスライドを後退、スライドストップを下げて元へと戻すとトリガーを引く。

チン、と澄んだ音を立ててハンマーが落ちると、レンは顔に笑みを浮かべた。

「いい銃だ」

そのままガンケースに入っていた弾丸を込めようとケースを手に取り、それが普通の物より重いのに気付くと顔をしかめた。

「まさかホットロード（炸薬増量薬莢）か？」

「そのまさかだよ。ほんとに何考えて…」

そこでふと何かを思い出したスミスの手が止まった。

「思い出した。親父がSTARSの一人と友人なんだが、その人がこれらの注文しに来た時に何に使うんだって親父が聞いたら、その人こう言っただ。 “ ゾンビ退治に行く ” って」

それを聞いたレンの手も止まる。そのままあごに手を当てた状態でしばらく思案する。

「そういえば、家にもSTARSの隊員だ、って人がナイフを買いに来てたな。やはり警察は何か知っていたのか？」

「いや、だとしたらもつと凄い量の注文が来てもおかしくないが、少なくとも他にこんな物騒な物の注文は受けてない。それに分かってたならその前に市民を脱出させるモンじゃないのか？」

「こう考えたらどうだ。警察の極一部、署長やSTARSといった本当に一握りの者だけが知っていたとしたら？」

「それこそおかしいぞ。だったら市民の絶対保護を目的にしているSTARSが黙っている訳がないじゃないか」

二人ともそのまましばらく考えこむが、やがてスミスが降参したように両手を上げた。

「止めた。オレみたいなのがどんなに考えたって分かる訳が無え。こういうのはそれこそミリイみたいな頭脳明晰な優等生が…」

そう言いながらミリイの方へと視線を写したスミスの目に、妙に真剣な表情でそこいら辺にある銃に適当な弾を込めようとしているミリイの姿が入ってきた。

「ミリイ、何やってんだ？」

「え、ああ。あたし銃の事なんてよく知らないから、どうやっていいか分かんなくて」

レンが近寄って見ると、彼女は一生懸命マグナムに9mmパラベラム弾を込めようとしていた。

「……………そいつは口径が違う。こっちを使え」

レンはホルスターからクーガードを抜いてミリィへと手渡す。ミリィは驚いた顔でそれを受け取った。

「いいの？これってレンの愛用のじゃ？」

「オレはこっちを使うからいい」

レンは手にしたサムライエッジを見せると、装弾の終わったそれをホルスターへと収めた。

「ありがとう」

礼を言いながらミリィはクーガードを受け取る。そしてそれに弾を込めようとあちこちをいじくり始めた。

「グリップの所にあるボタンを押せ。それでマガジンが出てくる。後はそれに弾を込めてスライドを引けばいい。ダブルアクションのみだからそれでトリガーさえ引けば弾が出るようになる」

「あ、ありがとう」

少し照れながらミリィは言われた通りにして弾を込め始めた。それを横目で見ながら、スミスはわざと大きな声を出した。

「なあレン。ダブルオーバック（散弾の中で最も粒が大きい弾丸）とスラッグ弾（ショットガン用の単発弾頭）、どっちをモスバーグ

に込めりやいいと思う?。」

「両方交互に詰めとけ。間違ってもそれで生きている人間撃つなよ」

益々過激になっていく装備を見ながら、レンは呆れたような声を出した。

装備を整えた三人は、これからの事を話し合う為に再び居間へと集まった。

「で、これからどうすんだ?」

「出来ればすぐにでもこの街から脱出したいとこだが、ここから先は街灯も少なくなってくる。夜ではゾンビの姿も見つけにくくなるし、疲労も溜まっているから出来れば朝を待ちたい所だが……」

そう言いながらレンはロバートの方を見た。

何が言いたいかを理解したロバートはフンと鼻を鳴らしながらぶつきらぼくに言った。

「分かったよ。それじゃあみんな泊まってけ。たいしたもてなしも出来ねえがな」

「ありがとうございます」

「重ね重ねすみません」

「いいって事よ。こんな状態じゃあしかたあんめえ」

「よ、親父太っ腹だな」

「お前は客の為に寝ないで見張りしろ」

笑いながら自分の背中を叩く息子に白い目を向けながらロバートは冷たく言い放った。

「そりゃ無いだろ親父い……………」

スミスは半泣きになって抗議した。

結局、ミリイを除いた三人で一人づつ交替しながら二人一組で見張りをする事になり、後番になったレンはベッドルームでミリイに傷の手当てを受けていた。

滲み出した体液が染み込んだ包帯を慎重にミリイは解いていく。ハーブの鎮痛効果が効いているのかあまり痛みは感じないが、体液で張り付いた包帯を剥がすとさすがに痛む。

「大丈夫？」

「ああ、何とかな」

レンが顔をしかめているのを見たミリイが心配そうに声を掛けるが、レンは無愛想に答える。

傷口からにじみ出ている体液を丁寧に拭き取り、救急スプレーで消毒を施した後に来る途中で見つけたグリーンハーブと鎮痛効果を高める効果のあるレッドハーブを混ぜ合わせた物を傷口へと貼り付け、新しい包帯を巻いていく。

「終わったわよ」

「済まないな」

手当ての終わった左腕を具合を確認すると、レンは傍に置いてあった備前長船を抜いてその刀身に損傷が無いかを確認、台所から拝借してきた包丁用の砥石を軽く架ける。

それを見ながら、ベッドまでも窓を塞ぐ為に使っている為、毛布に包まりながらミリイは床へと直に寝転んだ。

「ねえレン」

「なんだ」

「あたしのパパとママはどうなったかな……………」

「……………」奇病の感染者はそのほとんどが病院にいた。病院にいた君の両親はおそらくもう……………」

「そう……………」

なるべく意識して感情を込めないように言うレンに、ミリイは短く答える。

その事は何よりも彼女が一番よく分かっているはずだったが、それでも認めたくはなかったのだらう。

「あのね、レン」

「ん？」

「あたしね、小さい頃からパパみたいなお医者さんになりたかったの」

寝返りをつつてレンへと背中を向けながら、ミリイは小さな声で喋り始める。

「それで、何時の日か家族三人で、どこか山間の小さな村で小さな病院を開きながら静かに生活するのが夢だったの。それもいいな、ってパパもママも言ってくれてたから、小さい頃から医者になる為に一生懸命勉強してきたわ。だけど……………」

小さく鼻をすすする音が聞こえ、少し涙声になりながらもミリイは続けた。

「あたしの覚えた事なんて何の役にも立たなかった。パパとママを

助ける事も出来なければ、レンやスミスの足手まといになつてばっかだし、それに……」

そこで涙声はすすり泣きへと変わる。それを聞きながらレンは研ぎ終えた刀を鞘へと収め、毛布に包まりながら床へと寝転んだ。

「後悔してるのはオレだって同じだ」

「！」

レンの意外な告白にすすり泣きが微かに止む。

「母さんの実家は日本じゃ有名な陰陽師、こつちでいうとこのエクソシストの家系でな、オレの剣技、光背一刀流は本来その家に伝わる退魔用剣術なんだ。オレはその正当後継者の従兄が鉄骨を両断したり、ガラス瓶に入れた枝をガラス瓶を斬らずに枝だけ斬るのを見た事が在る」

「まるで手品ね」

ミリイがくすりと笑つのを聞きながら、レンは更に続ける。

「だけど、それが出来るようになるまでそいつがどんなに厳しい修行を積んだかもオレは見た事が有った。オレには絶対無理だと思つた。だから基本だけしか習わなかった。素質は有つたらしいんだがな」

レンはそこで一息付く。

「後悔してるよ。何でオレはあの時ちゃんと修行を受けなかったのかつて。もっとちゃんとした修行を受けてればこんな傷を負う事も無かつたろうし、もっと大勢の人を助ける事も出来たかもしれない」

「レン……」

「だからオレは何が何でもこの街から生きて脱出する。そして日本に帰って修行してもっと強くなる。今考えているのはそれだけだ」

言うだけ言うとレンはミリィに背を向けた。

「明日は日の出と同時に出発するぞ。早いとこ寝ておけ」

「レン」

「なんだ」

「ありがとう」

それだけ言うと、ミリィは目を閉じた。

レンの脳裏に、目の前で自殺した女性の事が思い浮かぶ。

（彼女だけは、なんとしても護ってみせる）

隣から静かな寝息が聞こえて来たのを確認してから、レンは眠りに付いた。

闇の中を、荒い呼吸をしながら走っていた。

右手には抜き身の日本刀、左手には家から勝手に持ち出したベレッタM92FS、体には余った裾を捲り上げて強引に着込んだタクティカルスーツを着たレンは必死になってそれから逃げていた。

振り返り様、ベレッタを乱射。

放たれた弾丸は闇を貫き、そして消える。

だが、追ってくる気配は一向に消えない。

物陰に隠れ、なんとか呼吸を整えようとした時、突然周囲の闇が実体化してレンへと襲い掛かる。

「う、うわあああ！」

絶叫しながら、刀を無茶苦茶に振り回す。

覚えた剣術も何も思い出せなくなっていた。

が、闇は刃を掻い潜り、レンへと迫ってくる。

そしてそれがレンを捉える瞬間、突然虚空から出現した別の刃が影を貫き、両断する。

両断された闇は現れた時を逆戻しするように、虚空へと掻き消える。

そして、そこには代わりに日本刀を持った一人の若者が立っていた。

墨色に染め上げられ、胸に五芒星の紋の入った小袖袴を着込んでいる風変わりな格好をした若者は鋭い目付きでレンを睨みつける。

「だから来るなって言っただろ！」

「だけど……………」

しどろもどろになるレンに、若者は更に激しい言葉をぶつけようとするが、そこで突然闇へと向き直り、八双に構える。

「まだ滅んでいない……………来るぞ」

レンは唾を飲み込むと、僅かに震えながら若者と背中合わせになつて刀を正眼に構える。

「落ち着いて修業を思い出せ。お前なら出来る」

若者の言葉を背中に受けながら、レンは呼吸を整え、精神を研ぎ澄ます。

摺り足で微妙に両足の力配分を加減しながら、慎重に周囲の気配

を探っていく。

闇の中で、独特のリズムを持った二つの呼吸音がしばし響く。永劫にも感じられるような緊張した時間が過ぎ、レンの頬を緊張の汗がつつたって地面に落ちようとした瞬間、突然眼前の闇が形を持つてレンへと襲い掛かる。

「はあああああ！！」

闇へと向けて、レンは渾身の力を込めて刀を振り下ろした。

「……………懐かしい夢を見たな」

短い眠りから目覚めたレンは、そう呟きながら体を起こす。

五年前、生まれて初めて実戦で戦った時の夢だった。

自分を経由して従兄へと持ち込まれた依頼に興味本位で付いていき、そして生まれて初めて敵に対して刀を振るった。

だが、今よりも更に未熟だった当時のレンは絶体絶命のピンチに陥り、従兄に助けられた。そして、従兄のサポートに徹しながら敵をなんとか倒した。

（今度はオレが誰かを助ける番、か）

隣で静かに寝息を立てているミリィに視線を移す。

ロッカーの中で泣いていた彼女の姿に、その時の自分の姿が重なったように見えた。

ふと壁に架かっている時計を見ると、見張りの交替時間になろうとしていた。

（守ってみせるさ。オレが生きている限り）

ずれている毛布をミリーの肩に架け直すと、武器を手にレンは物音を立てないようにして部屋を出た。

「なあスミス」

「なんだよ親父」

見張りをしながらレッドホークの整備をしていたスミスは、父親に適当な返事を返しながら整備を続ける。

「この街から出た後どうするつもりだ？」

「……………分かんね」

「母さんのところに行くのか？」

「……………さあな……………」

二人とも、そのまましばらく無言。

「なあ親父」

「なんだよ」

「何でお袋と別れたんだ」

意外な質問に、ロバートがしばらく沈黙するが、やがて苦い顔で喋り始める。

「さあな、色々あったからな。おめえがガキの頃弾込めてねえ銃で遊ばせた事とか、家族サービス放っぱりだしてガンのオークションに行ってた事とかな」

「最低の父親だな」

スミスが笑いながら、整備の終えたレッドホークに弾を込めていく。

「なあ、スミス。もし母さんのところに行ったら伝えておいてくれ」
「何をだよ？」

「済まなかったな、あばずれが、って」
「自分で言えよ。代わりに殴られるのはゴメンだ」

弾を込め終えたレッドホークをホルスターへと戻しながら時計を見る。

「そろそろ交替の時間か」
「スミス」

「今度はなんだよ」
「寝てるのをいい事に襲うなよ」
「誰が襲うか！それにオレにはちゃんと好きな子が…」

そこまで言っ、スミスは慌てて自分の口を塞ぐが、ロバートは薄笑いを浮かべていた。

「知ってるぞ。レンの妹だろ」
「何で知ってやがるんだ！」
「人生の先輩なめんじゃねえよ」

慌てふためく息子をさも面白そうに見ながら、ロバートはさらにかからう。

「で、どこまで進んでんだ？まさかもう行き着くところまで行っただけ？」

「ユメちゃんはまだ14だろうが！ただミカエルフェスティバルに

「一緒に行こうと誘っただけだ！」

「なるほどアプローチはしている訳だ」

スミスが巧みに父親の誘導尋問に乗せられているのに気付いた時には、すでに洗いざらい喋ってしまっていた。

顔を真っ赤にしながら父親を睨み付けるが、言ってしまった後では何の効果も無い。

「ま、運がいいのか今日日本に行ってるらしいからな。無事に生きてこの街から出られたらキスの一つもねだってみたらどうだ？」

「やかましいわ！この変態親父！」

「お前と一緒にするな。22越えねえ女はオレにとっちゃガキだ」
「何の話だ？」

ふと気付くと、何時の間にかすぐ傍に仮眠から起きてきたらしいレンの姿が有った。

「いや、じつはスミスの野郎が…」

「喋るな！殺すぞくそ親父！」

吼えるだけ吼えながら、スミスはレンと交代で仮眠へと入った。

「結局ホントに何の話だ？」

ゆっくりと昇ろうとする朝日の中、その朝日とは似つかわしくない動く屍達は、自らの飢えを満たす為の獲物を探していた。

もはや五感すら働いているのかどうか怪しいはずのそれらは、微かな感覚を頼るのか、それとも独自の感覚が有るのか、ゆっくりゆっくりとその数を増しつつある一つの家へと向かっていた。

生き残る為に足掻く者達がいる場所へと。

「増えてきてるな……………」

「ど、どうすんだよ」

塞がれた窓の僅かな隙間から外を見ながら、レンは焦りを感じていた。

「やっぱり昨夜の内に出発の方がよかったんじゃないのか！？」

「あの数に夜中に襲われてみる。ゾンビの夜食になるのがオチだ」

動揺しまくっているスミスをたしなめながら、レンはこの窮地を脱出する方法を模索した。

「裏から出て店から通りへ抜けな。少なくともこっちはよりはマシのはずだ」

突然のロボートの提案に、一同は顔を見合わせ、一様に頷いた。

「それしかないか」

「急ぎましょう」

裏口へ向かおうとした時、ふとロボットがその場を動かこうとしないのにスミスが気付いた。

「何やってんだよ親父。とっとと行こうぜ！」

「先に行きな。オレは後から行く」

そう言いながら、レミントンを構える父親の考えている事をスミスは唐突に理解した。

「ば、馬鹿な事言つなよ親父！死んじまうぞ！」

「安心しろ。オレには切り札が有るんだ」

「切り札だか何だか知らねえけど、そんなんでどうにかな……」

必死に説得しようとするスミスの頬を、いきなりロバートは力任せにぶん殴った。

「父親が行けつて言うんだからおとなしく行きな」

床に倒れている息子を厳しい表情で見ていたロバートは一転して顔に笑みを浮かべた。

「それに、てめえがどんなアホ面でガールフレンドにプロポーズするかを知るまでは死ぬに死ねねえさ。だからとつと行きな」

「親父………」

「ロバートさん………」

言葉を失っているスミスとミリーの脇から、レンは一步ロバートの傍へと近寄ると深々と頭を下げた。

「今まで、お世話になりました」

「お得意さんにサービスするのは当たり前だろうが。礼はいいからとつと行きな」

すでにあちこちらの窓から窓を叩く音が聞こえ、その内のいくつかからはゾンビの腕が中へと進入してきていた。それを見たロバートの表情が険しい物へと変わる。

「もう話している時間もねえ！急げ！」

赤く腫れた頬を押さえながら立ち上がったスミスは、父親を睨み付けながら裏口へと向かおうとした。

「いいか親父！ぜってえに死ぬんじゃないぞ！」

「しつこい奴だな！そんなんじゃない彼女に嫌われるぞ！」

途端、玄関が無数のゾンビ達によって破られ、次々とゾンビ達が家の中に入ってきた。

それへと向けて散弾を撃ち込みながら、ロバートはその場から三人が裏口へと向かおうとするのを横目で確認した。

「来なゾンビ共！ここから先は進入禁止だ！」

そう言いながらロバートは次々と散弾を撃ち込むが、圧倒的なゾンビ達の数に瞬く間に弾丸は尽きる。

「こいつの出番か」

ロバートは傍らに置いておいた切り札に架けておいた布を取り去る。

そこから出てきたのは、ガソリン入りのポリタンクとガスボンベを括り付け、点火用に弾丸から取り出した炸薬入りの紙袋を貼り付けた手製の爆弾だった。

「おりやああああ！！！」

気合と共にそれを玄関の外にいるゾンビ達の中心へと放り投げ、

腰から素早く予備用の銃を取り出してそれにポイントした。

「死ぬなよ、くそガキ共」

そう呟きながら、彼はトリガーを引いた。

突然後ろから聞こえて来た爆発音に三人が振り返ると、そこには大きな爆炎が上がっていた。

「親父いいいいい！！！」

スミスが泣きながらの叫びが虚しく響くが、答える声は無い。

「振り返るなスミス！前だけを見ろ！」

レンが叫びながら傍に近寄ってきていたゾンビの一体を斬り捨てる。

「ちくしょう……ちくしょおおおお！！！」

スミスは泣きながらこちらへと近付いてくるゾンビに向けてモスバーグを向けた。

「う、っ……」

鈍い頭痛でロバートは目を覚ました。

見ると、壁に叩きつけられた自分の体にゾンビの死体がかっ
ていた。

それを退けながら周囲を見ると、すでに高くなっている太陽

が大破した玄関と動かなくなった無数のゾンビの死体を照らしていた。

無言で足元に転がっていたレミントンを拾い、店へと向かう。

店のウィンドウからは幾つか動かないゾンビが見えたが、少なくとも息子達の死体が無い事だけを確認すると、普段のようにカウンターの椅子へと座り込み、そこいらにある弾丸を銃へと装填し始めた。

何故か息子達の後を追うという考えは起きなかった。その場所こそが自分があるべき場所だという考えだけが脳裏に有った。

「客はもう来そうにねえな……………」

独り言を言いながらも、普段のようにカウンターに陣取り、店番の真似を試みる。

彼の元を、今回の事件を謎解く人物が訪れるのはこの二日後の事だった。

第五章

それは、異常に腹を空かせていた。

数日前まではペットとして飼われていたそれは、それ自身が気が付いた時にはそれ用に整えられた水槽という環境から、下水という不衛生極まりない環境へと放り出されていた。

そこを泳ぎ回る内、空腹を覚えたそれは下水にいたゴキブリの死体を口へと入れた。

だが、なぜか食っても食ってもその飢えは満たされなかった。

直にゴキブリからネズミ、ネズミからそれを狙う猫へと獲物を拡大していった。

何故か食えば食うほど腹は減り、広がったはずの下水が窮屈な場所になっていた。

それは、その時すでにその種にあらざる怪物へと変貌していた。

そして、下水に自分を満足させられる餌が無い事を知ったそれは、違う場所に餌を求める事にした。

すなわち、生きる為に足掻く生者と生ける死者の跋扈する地上へと……………

「……………ここからは先には進むのは無理のようだな」

道を塞ぐように横転しているバスの陰から先の様子を見たレンが、小声で背後の二人にささやく。

「先どころか、ここにいるのもまずいんじゃない……………」

レンと同じようにして先を見たミリイが顔を青ざめさせる。
そこには無数のゾンビがたむろし、死体やもしくは動かなくなっ
た同族を貪り食っている様子があちこちに有った。

「……………強行突破するか？」

ケンド銃砲店を出て以来、一言も口を聞かなかったスミスが低い
声で呟く。

「無理だ。数が多過ぎる」

レンが否定すると、スミスは無言でそっぽを向いた。
その背中から、強く齒軋りする音がミリイの耳に届く。

「スミス…お父さんの事は……………気の毒だったけど……」

「親父はきっと生きている。それ以上言うな」

異常なまでにドスの利いたスミスの声に、ミリイがビクリとして
言葉を詰まらせる。

「その事は後回しだ、迂回しよう」

レンの提案に無言でスミスは小走りに走り出す。
が、すぐ傍の路地裏に通じる曲がり角を曲がった所で、その足は
止まった。

「ここにもバリケードが……………」

ミリイが懷に入れておいた地図を取り出すと、先程の通りと今の
路地に×印を書き込む。

その他にも地図には幾つか×印が書き込まれ、予定していた通り道からはかなり迂回している事がそれから見て取れた。

「どうしよう……ひょっとしたらこの辺ほとんど封鎖されてるんじゃない……」

「でなければゾンビ専用歩行者天国になってるからだかな。また下水でも通るか？」

ミリイが背中中のナップサックから下水の配管図を取り出して地図と照らし合わせるが、すぐにその表情は曇った。

「ダメね。ここから先は全部小さな分管しか通ってないみたい。第一、またあの怪物に会つかもしれないわ」
「くそっ！」

悪態を付きながらスミスが建物の壁を力任せに殴りつける。

レンはその様子を黙って見ていたが、ふとスミスの殴った所を見ると、そこから視線を上へと向ける。

「なあ、ここいら辺の建物って高さ同じだったか？」

「え？ええ、確か市街地開発計画の時に建てられた物だから、この区画は一部を除いてほとんど同じ高さだと……あ！」

そこで、ミリイにもレンの狙いが分かった。

「下が駄目なら、上を通るって方法もある」

「上って、建物のか？通れるとしても一区画だけだぞ」

「ゾンビの密集地帯さえ抜ければいい。それが駄目でも周囲の様子が分かれば対策も立てられる」

「……………そうだな」

スミスは頷くと、早速手近の建物に通じるドアを探し始める。

「……………有った」

バリケードの向こう側にドアを発見したスミスが背後の二人に手招きする。

「向こうにゾンビはいるか？」

「いや、見える範囲にはいないな」

言うやいなや、スミスはバリケードをよじ登り始め、上まで登ると一気に飛び降りて周囲を警戒する。

「大丈夫だな。早く来い」

その後が続いてミリイがレンの手助けを借りながらもなんとかバリケードを超え、最後にレンが身軽によじ登って軽々と降りた。

「カタナだけじゃなくて、運動神経もいいのね」

「剣術習ってた頃に比べると少し落ちただけだな」

「ちっ、閉まってやがるな」

ドアノブに手を掛けたスミスが、短い悪態と共にいきなりモスバーグの銃口を向けたのを見たレンが慌てて止める。

「馬鹿！こんな所で銃声なんか響かせたら周囲のゾンビが寄ってくるぞ！」

「……………そうか」

「どいて」

ミリイがスミスを押し退けるようにしてドアの前に立つと、前と同じ要領で鍵穴を覗き込み、工具を使っていじり始める。

「……まだか？」

「ちょっと待って」

なかなか鍵が開かない事に焦りを感じ始めた頃、小さな音を立てて鍵が開いた。

「開いたわ」

「念の為下がってろ」

レンがドアを僅かに開けて中を覗きこむ。

視線の先に一体のゾンビらしき人影を見つけたレンは手で二人に下がるように合図しながら、ゆっくりとドアを開くといきなり駆け出してゾンビとの間合いを詰める。

何に反応したのかは分からないが、ゾンビがこちらに振り向いた時にはすでにレンは居合の範囲まで間合いを詰めていた。

ゾンビの手前でレンの体が一瞬沈み、次の瞬間には跳ね上がりながら抜刀、一瞬にしてゾンビの股間から脳天まで両断されて崩れ落ちる。

「光背一刀流、《昇陽斬》しょうやうざん」

技の名を呟きながら、レンが刀を一振りしながら周囲に他のゾンビがいらないのを確認してから鞘へと収め、外にいる二人を招き寄せる。

「ここにも……」

「くそつ、一体何匹いやがるんだ！」

「この街の総人口よりは多くないだろ」

「それ以上いて堪るか！」

スミスが怒鳴りながら乱暴にドアを閉める。

「苛立つのは分かるが、少し冷静になれ。あまりピリピリしてるといざって時に判断を誤るぞ」

「ああ、分かってるよ！」

レンの忠告を聞いてか聞かずか、スミスが怒声を撒き散らしながら一人で先に進もうとする。

「おい、スミ…」

レンが呼び止めようとするのを、ミリィが袖を掴んで止め、無言で目配せする。

その意図を汲んだレンもそれ以上何も言わず、黙ってスミスの後に続いた。

気まずい雰囲気のまま三人が階段を登り、三階部分まで来た時だった。

階段へと続く通路に、二体の男女のゾンビを見つけたスミスが無言でモスバーグの銃口を向ける。

が、その内の一体が振り向いた途端、スミスの顔色が変わった。

「ジ、ジョージ！？」

そのゾンビがクラスメートである事に気付いたスミスがモスバーグを構えたまま震え出す。

それに続いてもう一体のゾンビもこちらを向くと、二体そろって

こちらへと向かってくる。

「リン！？来るな！来ないでくれ！」

その二体が両方クラスメートである事を知ると、スミスが全身を震わせながらモスバーグを降ろし、叫ぶ。

「頼む！撃ちたくないんだ！来るな！」

「どけっ！スミス！」

目前まで迫っても撃とうとしないスミスを押し退けるようにしてレンが前に出ると、素早い動きでゾンビとの間合いを詰める。

「止める！！」

スミスの静止も聞かず、レンは抜刀すると瞬く間に二体を斬り捨てる。

「レン！てめえ！」

それを見たスミスがレンの襟を掴み上げる。

「止めてスミス！」

「うるさい！」

ミリィが止めに入るが、スミスはそれを押し退けるとレンを睨みつける。

「てめえ、クラスメート殺して何とも思わないのか！」

「間違えるな！彼らはもう死んでいる！」

「だから斬れるってのか!？」

「それじゃあこのままゾンビとして生かしておけと言っのか!？一
思いに眠らせてやるのがせめてもの慈悲だ!」

「じゃあ、はいそうですかと言って殺せるか!」

「止めて!二人共止めて!」

ミリイがスミスに取りすがって必死になって止める。

二人はそのまましばらく睨み合っていたが、やがてスミスが乱暴
にレンの襟を離す。

「勝手にしろ!ここからはオレ一人で行く!お前は好きなだけ殺し
て生き延びればいいだろ!」

「そんなスミス!待ってよ!」

一人で先に行こうとするスミスをミリイが手を掴んで止めようと
するが、その手を振り解いてスミスはそのまま階下へと降りていく。

「いいの?止めなくて……………」

ミリイの問いに、レンは無言で首を横に振る。

「あいつも分かってるんだ。ただ、今少し精神的に落ち着いてない
だけだ。頭が冷えれば戻ってくるさ」

レンはそのまま、上の階を目指して歩き始める。しばし迷った後、
ミリイはレンの後に続いた。

「ちつくしょう……………」

一階と二階の中間部分の踊り場に腰掛け、スミスは自己嫌悪に陥

っていた。

（間違えるな！彼らはもう死んでいる！）

レンの言葉が、スミスの耳に張り付いて離れない。

「分かってる……………分かってるけどよ……………」

あのゾンビ達が人間でなくなっている事は納得しているつもりでいた。

だが、実際に知人がゾンビとなっているのを見た時、どうしても撃つ事は出来なかった。

（狙って引き金を引く、それだけだ。大事なのは撃つ時を間違えな
いって事だな）

初めて父親から射撃を教わった時に言われた事を、スミスは思い出す。

「どうすりゃいいんだよ……………親父……………」

今まででの人生の中で、一番頭を使いながらスミスは悩む。
だが、答えは一向に出てきそうに無かった。

錆付いてなかなか開かなくなっているドアを苦勞して開け、レンとミリイは建物の屋上へと出た。

「ここは大丈夫のようだな」

周囲を警戒していたレンが自分達以外に動く物が無いのを確認すると、用心の為に抜いておいたサムライエッジをホルスターに戻す。

「何処か安全地帯在る？」

ミリイが地図を取り出しながら、下の様子を見る。

「その通りが封鎖されてるから、一つ向こうの通りに降りれば何とかなるかもな」

レンも下を覗き込みながら屋上の周囲を回る。

「なあ、ミリイ」

「なに？」

「オレの事、冷酷な人間だと思うか？」

「……………分かんない」

いきなりの問い掛けに、ミリイはしばし迷ってからそう答えた。

「レンにはレンの考えが有るんだろうけど……………あたしには相手が例え誰のゾンビでもとても殺せないかも……………」

ミリイがレンから渡されていたクーガードを見ながら呟く。

「あれが何に見えるか……………だな」

レンがはるか下を動いているゾンビを見ながら呟く。

「オレには、あれが救いを求めている亡者に見えるんだがな」

「救いを？」

意外な言葉にミリイがレンの方に振り返る。

「小さい頃な、オレには普通の人には見えない物がよく見えた。苦しい表情してるのが多くてな。小さいなりにどうすればいいか悩んだ事も有った。小学校に上がる頃には見えなくなってたんだがな」

そこで一息の間を入れ、レンは視線を遠くへと移す。

「十歳になったかどうかの時、初めて伯父さんがそういった物を斬り払うのを見た。それ以来かな、光背一刀流を習い始めたのは。結局、高校入る前に辞めちまったけど」

「レン……………」

何を言えばいいのか分からず、ミリイは黙ってレンの言葉を聞く。

「そんな未熟者のオレに出来るのは、この刃と銃で死にきれない亡者を眠らせる事だけだ」

レンが腰の刀を僅かに鳴らす。瞳には、強い意志が込められているようにミリイには見えた。

「つまらない事聞かせたな。早い所脱出ルートを探そう」
「そうね」

レンが隣の建物との高さを比べる。

若干の高低差があったが、なんとかなると踏んだレンは周囲に何かロープ代わりになる物がないかと探したが、妥当な物は見つからなかった。

ふと、隣のビルの屋上に物置らしき物を見つけたレンは、そこに期待して隣のビルへと飛び移る。

「レン！」

「待ってる。ハシゴか何かを…」

そこで、階下へと続くエレベーターが短い電子音と共に開き、そこからいきなり複数のゾンビ達が溢れ出してきた。

「なにっ!？」

驚きながらも、レンは即座に抜刀し、先頭の一体の首を斬り飛ばす。

だが、そこで一際体格のいいゾンビが意外な速さでレンへと襲い掛かる。

一瞬反応の遅れたレンがとっさに右腕のプロテクターをそのゾンビへと噛み付かせ、その隙にサムライエッジを抜こうとするが、そのゾンビの予想外の力にそのまま押し倒され、そのショックでサムライエッジはレンの手から離れる。

「しまった……………」

そのゾンビは凄まじいまでの力でレンを組み敷き、樹脂製のプロテクターは軋み音を上げ始める。

なんとかその戒めから逃れようとするレンが、ふとそのゾンビの顔に見覚えが有る事に気付く。

「ピーター先生!？」

それが、通っている高校の体育教師である事に気付いたレンの顔色が変わる。

(確かピーター先生、元ウエイトリフティング選手だぞ……………)

相手の怪力にある意味納得したレンの視界に、他のゾンビ達がゆっくりと近付いてくるのが飛び込んでくる。

「レン！！」

「来るな！」

ミリィが絶叫しながらクーガードを抜き、ためらいながらもトリガーを引いた。

だが、銃を扱った事の無い彼女の放った弾丸は、狙いを大きく逸れて何も無い所に虚しく弾痕を刻む。

「当たって！」

ミリィは立て続けにトリガーを引くが、その半分は狙いを外れ、残る半分は周囲のゾンビに当たるが致命傷には程遠かった。

そこで、乾いた音を立てて弾丸が尽きる。

何度かトリガーを引いてようやくその事に気付いたミリィが慌てて弾丸を装填しようとするが、一瞬の油断で取り出したマガジンはミリィの手からこぼれ、ゾンビの傍へと滑り落ちていく。

「待ってて！今スミスを呼んで来る！」

ミリィは即座に踵を返して階段を駆け下りていく。

「それまで持てばな……………」

絶体絶命の状況に、レンは珍しく弱気な事を言いながら、奥歯を噛み締めた。

上の方から聞こえてきた銃声に、スミスは思わず立ち上がる。

「……………何か有ったのか？」

様子を見に行くべきだろうか？と思ったスミスの耳に、階段を大慌てで降りてくる足音が響く。

何事かと思ってスミスは階段を登り始めた所で、もつれるように落ちてきたミリイを胸で受け止めるような状態になった。

「ミリイ？レンは？」

「スミス！早く！屋上でレンが…」

最後まで聞かず、スミスは猛烈な勢いで階段を登り始めた。

（オレは何をやっていた！？つまない事で友達を危険な目に会わせるなんて！）

階段を登りながら、スミスは猛烈な後悔をしていた。

（もしアイツに何か有ったらユメちゃんになんて説明すりゃいいんだ！詰まんない口喧嘩が原因でレンを見殺しにしたらとんでもねえ大馬鹿じゃねえか！頼む！オレが行くまで無事でいてくれ！レン！）

生まれて初めて、何かに必死に祈りながらスミスは階段を登っていく。

激しい息切れを感じながら、スミスは屋上へと続くドアを体当たりしながらこじ開ける。

「レン!!」

「スミス!こつちだ!」

レンの声のした方向を見たスミスが絶句する。

そこには、大柄なゾンビに組み敷かれたレンと、その周囲を取り囲むゾンビ達の姿が有った。

幸か不幸か、その大柄なゾンビの体格にレンの体は完全に隠れ、周囲のゾンビ達は手を出すに出せない状態でした。

「今助ける!」

スミスは背中に背負っていたルガーM77マーク2を降ろして構えると、ダットサイトを覗き込んで狙いを定める。

「!?!ピーター先生!?!」

そして、そのレンを襲っているゾンビの頭部に狙いを定めた瞬間、それが誰か気付いたスミスの指先が震え始める。

(彼らはもう死んでいる!)

(大事なのは撃つ時を間違えないって事だな)

スミスの脳裏に、レンと父親の言葉がリフレインする。

(撃つ時を……間違えるな!)

意を決してスミスは狙いを定める。何時の間にか指の震えは消えていた。

サイト内のレーザーポインタを正確にゾンビの頭部にポイントする。

（僅かでもずれば、間違い無くレンに当たる……………）

張り詰めた緊張感の中、スミスはトリガーを引いた。

発射された弾丸は大気を切り裂き、ゾンビの頭蓋へと炸裂、当たった瞬間に内部に封入されていた炸薬が灼熱の炎を脳髓へと撒き散らし、それをかき乱して半熟のたんぱく質の塊へと変える。

レンの体に掛かっていた圧力が消え、砕けかかっていたプロテクターが力の抜けた死の顎から外れる。

スミスはそれを確認すると、素早く次の敵に狙いを定め、トリガーを引いた。

短「中距離用に改造されたスナイパーライフルから放たれた弾丸は正確にゾンビの頭部を撃ち抜き、次々と絶命させていく。

レンが完全な死体となった教師の亡骸の下から這い出した時には、周囲のゾンビはスミスの手によって全てが倒されていた。

「助かった。ありがとう」

「礼はいいよ……………さっきは悪かったな」

ルガーM77マーク2を降ろしながら、スミスはぼそりと呟く。

「いや、お前の言う事も間違っちゃいないさ。覚悟が決められるかどうか、違いはそれだけだ」

レンがサムライエッジを拾いながら、苦笑を浮かべる。

「……………レン…生きて……………る……………？」

その時になって、ようやくミリィが荒い呼吸をしながら階段から姿を現す。

「レンは無事だ。危ない所だったけどな」

「よ、よかったあ……」

緊張の糸が切れたのか、ミリイはその場に崩れ落ちるようにへたり込んだ。

「この様子だと、本気で安全な所は何処にも無さそうだな。急いだ方がいいな」

刀を鞘に収め、砕けて物の役に立たなくなったプロテクターを外すと、レンは物置の中を探り、そこから脚立を見つけるとハシゴ状にして隣の建物へと移り、下の様子を窺う。

「こつちからなら何とか行けそうだな」

手招きするレンに、スミスは建物の高低差を見て渋い顔をする。

「あいつ、ここ飛び降りたのか？」

建物の隙間はほとんど無いが、有に5mはある高低差を見てスミスは思わずミリイに問い返す。

「改めて見ると結構あるよね……」

ミリイも困ったような顔をしていると、ようやくそれに気付いたのか、レンがいとも簡単に隣の建物の屋上に飛び降りると脚立を持つてスミス達の足元へと架ける。

「どういう運動神経してるんだ？お前……」

「居合の基本だって言われてな、下半身の瞬発力と敏捷性は鍛えて

あるんだ」

脚立を降りた二人と共に、レンが屋上を横切って反対側の建物に脚立を立てかける。

ふと、そこでミリイが完全な屍とかした教師の元で黙祷を捧げているのに気付き、レンとスミスもそれに習って無言で黙祷を捧げる。

「行こう。あまり立ち止まっている時間は無い」
「……………そうだな」

脚立を登り、下の様子を窺ったスミスの顔が怪訝な物になる。

「確かに向こうよりは少ないが、それでも結構いやがるな……………」
「20……………って所だな。ここから狙えないか？」
「やってみる」

スミスはM77マーク2を構えると、慎重に狙いを定め、引き金を引いた。

放たれた7.62ミリライフル弾は数十mの距離を一瞬にして飛翔し、目標のゾンビをかすめてその背後の商店のウィンドウガラスに突き刺さる。

「あれ？」
「……………あまり無駄弾を使うなよ」

レンもサムライエッジを抜くと、屋上の端から真下にいるゾンビに狙いを定める。

炸薬量の違いからクーガードよりも大きな銃声を上げながら放たれた9ミリパラベラム弾は真下にいたゾンビの脳天を正確に貫き、体内の中央まで潜り込んだ所で止まる。

ゾンビは僅かによるめき、その場に倒れ伏す。
が、続けて放たれた弾丸は僅かに狙いをそれ、隣にいたゾンビの肩を貫く。

「思ってたより難しいな」

「全滅させる必要はないだろうしな。下に降りてからショットガンで狙った方が確実だな、これは……………」

無倍率のダットサイトを搭載している事を差し引いても、命中率が3発に1発という自分の狙撃の腕に呆れながら、スミスは慎重に狙いを定めた。

しばし、二つの銃声が交互に辺りへと木霊する。

「……………第三者から見れば、こいつもただの虐殺なんだろうな……………」

空になったマガジンを取り出しながらのレンの呟きに、スミスの指が止まる。

「……………かもな。だけど、オレは生き残りたい……………」

スミスも呟きながら、増装マガジンを外して弾を込めていく。

「死にたくないから、ここまで来たんじゃない。だから、その事だけ考えようよ」

慣れない手付きでクーガードのマガジンに弾丸を装弾していたミライが小さく呟く。

「そうだな」

レンはそれに応えると、装填を終えたマガジンをサムライエッジに叩き込み、初弾をチェンバーへと送り込むと、屋上の隅に有った避難用ハシゴを下へと降ろす。

「行こう」

「おう」

同じく装弾を終えた増装マガジンを取り付け、初弾を装填させたスミスがふと影になっていた路地から新たにゾンビが一体出てきているのに気付く。

最後のシメのつもりでスミスはダットサイトを覗き込み、狙いを定める。

が、その瞬間何かがゾンビのいる地点を通り過ぎ、狙っていたはずのゾンビが消失する。

「？」

スミスがダットサイトから目を離してそちらを見た。

そこには、下半身だけとなったゾンビが僅かによるめき、倒れる所だった。

「！！レン！」

「どうした？」

ハシゴを降りようとしていたレンがスミスの方へと近付き、スミスが指差している方向を見ると、即座に異変に気付いた。

「何が有った？」

「分からねえ………何かが通ったと思った後には、ああなっていた

「……………」

「私達以外の生存者が撃ったとか？」

「いや、銃声はしなかったし、ここからだよく見えないが周辺に肉片一つ散らばっている様子も無い。一体何が？」

「……………いるんだろ。ここにもゾンビ以上の化け物が」

三人の間に緊張が走る。

誰かが唾を飲み込む音がやたらと大きく聞こえた。

「……………行こう。何が待ち構えているとしても、オレ達は進むしかない」

「うん……………」

「……………ああ」

震えているミリイの肩を叩きながら、レンはハシゴへと向かう。スミスは手にしたM77マーク2を背中へと戻し、モスバーグを手にした。

レンは下を見下ろし、動く物が無いのを確かめるとおもむろにハシゴを降り始めた。

後に続くこうとするミリイに待つように指示しながら、レンは安全を確認するように少しずつ慎重に降りていく。

二階分降りた所で、突然目の前の窓ガラスが乱暴に強打された。

そこには、こちらを見ているゾンビがその腐り掛けた手で今にもガラスを突き破らんとしていた。

「……………眠れ」

レンはサムライエッジを抜くと、ゾンビの額にポイントしてトリガーを引いた。

銃声と共に、ゾンビの動きが止まってそのまま背後へと崩れ落ち

る。

起きてこない事を確認して、レンがサムライエッジをホルスターに戻し、再びハシゴを掴もうとした瞬間、レンの足首を腐り掛けた手が掴んだ。

（！？下にもいたのか！）

一つ下の階の開け放たれた窓から、レンの足を掴んだゾンビはそのまますごい勢いでそれを引っ張る。

レンはハシゴを掴んでいる右手に力を込めながら、必死に足を振り回す。

しかし、体勢の崩れたゾンビはレンの足首を掴んだまま窓の外へと倒れ込む。

（しまった！）

一瞬にして二人分が増えた体重を支えきれず、レンの右手が掴んでいたハシゴから離れる。

「レン！？」

ミリイのしている先で、レンとゾンビは何も無い虚空へと踊りだした。

（間に合え！）

レンはとつさに逆手で刀を抜くと、それを足首を掴んでいるゾンビの腕へと突き刺す。

一瞬握力が緩んだ隙に、左手を精一杯ハシゴへと伸ばした。それがハシゴへと届いた瞬間、レンは力強くそれを握り締める。

一瞬左手に過剰な重量が掛かるが、次の瞬間にはそれは半減し、なんとかハシゴへと留まらせた。

直後、鈍い音が足元から響く。路面に直撃したゾンビは、しばしその場で蠢いていたが、やがて動かなくなった。

「レン！」

「無事か！？」

「なんとかな」

上から心配そうに見ている二人に合図しながら、レンはそのままハシゴを降りようとする。

よく見ると、地面から足まで1mと離れていない高さで彼はハシゴに掴まっていた。

「命が幾つ有っても足りないな」

何時の間にか頬をつたっていた汗を拭くと、レンは刀を鞘に収める。

上を見ると、スミスが手足を丸めるようにしたまるで亀のような状態で、なおかつ速度も亀並でハシゴを降りてきていた。

「……その状態は余計危ないとおもうぞ」

「そ、そうか？」

「そうよ」

すぐ後に続いて降りてきていたミリィからも言われ、スミスは少々手足を伸ばして（しかし速度は変えずに）降りてくる。

他にはゾンビはいなかったらしく、二人は無事に下まで降りてきた。

「ここからだ、少し進んでから通りを二つ越えれば郊外へと通じるルートに出られるわ」

「問題はさっきのか……………」

レンは周囲にゾンビがほとんどいないのを確かめてから、先程の下半身だけになったゾンビの方へと歩いていく。

「お、おい！いきなり襲われたら…」

「広い場所なら何かが来ればかえって分かりやすい。大丈夫だ」

レンは平然と死骸に近付くと、それを調べ始める。
が、すぐにその表情は怪訝な物へと変わった。

「？どうかしたか？」

「……………弾痕でも刃傷でもない。かといって齒型も無いから食い千切られた訳でもない」

ミリイも顔を青ざめさせながら、その傷口を見る。

「敢えて言うなら、押し千切れてるみたい……………」

「千切れて？そいつは一体……………」

「レン！こっち！」

スミスが路地裏を指差しながら叫んでいるのに気付いたレンとミリイがそちらへと向かう。

そこには、開け放たれたマンホールとそこから何かが這い出したらしい痕跡が有った。

「ひょっとして、あいつか！？」

スミスが下水道であつた怪物を思い出して震え上がる。

「いや、あいつの体格じゃここから出るには穴が小さ過ぎる。それにこれは？」

レンは這い出した痕跡に付いている妙な粘液のような物を凝視する。

「ひよつとして体液か？」

「さあ………これだけじゃなんとも………」

ミリィが傍に転がっていたコーラの空き瓶で粘液をつつくが、これだけでは判断の仕様も無かつた。

「用心しながら進むしかないな。分かつたのは一撃でゾンビの上半分を消失させる事が出来る何かがいるって事だけだ」

「くそっ！ハロウィンにやまだ早えぞ！」

「ハロウィンにもこんな得体の知れないのは出て来ないわよ………」

ミリィが力無く呟く。誰もそれに反論しようとする者はいない。

「行くしかないな」

「ああ………」

第六章

こちらへと近付いて来ていたゾンビが、その顔面にスラッグ弾を食らって大穴を開けながら路上に倒れ伏した。

スミスは無言で次の敵へとモスバークを向けると、散弾を叩き込む。

それでもまだこちらに来ようとするゾンビに向けて、レンはホットロードで威力を増してある9ミリパラベラム弾を撃ち込んでトドメを刺した。

「スミス、あんまり無駄弾を使うなよ」

「分かってるよ」

サムライエッジを降ろしながらのレンの言葉に、スミスは小さく答える。

「ここまで来れば街を出るまでもう少しね」

「ああ。だが、まだ安全とは思わない方がいい」

「あれか」

スミスが先程の下半身だけのゾンビの死体を思い出す。

今の所、それらしい怪物には出会っていない。だからといって、会わずに済むかどうかははなはだ疑問だった。

その内、視界にもう一体のゾンビを見つけたスミスは、それに銃口を向けた。

それは、微かに伝わる音から地上に獲物がいるのを敏感に感じ取った。

少し前に他の獲物を食って下水の中へと戻ったばかりだったが、その異常な食欲と消化能力の前にすでにそれは完全に消化され、文字通り血肉となっている。

そして、音の反響からその獲物のすぐ傍に地上への出口が有る事を確かめ、獲物が出口の一番近くに近寄ると同時に獲物へと襲い掛かった。

突然、こちらに近付こうとしていたゾンビの傍のマンホールのフタが爆発したように跳ね上がった。

そして、そこから飛び出してきた何かが一瞬にしてゾンビを頭から丸呑みにすると、即座に傍の路地へと駆け込んだ。

何が起きたか分からず呆然としていた三人は、マンホールのフタが路上に落ちる甲高い音と共に我に返った。

「な、何!？」

「何だ!？」

「敵か!？」

三者三様の驚きを示している内に、路地からはマンホールから飛び出してきた何かが、ゾンビを咀嚼する音が聞こえてくる。

腰の刀に手を掛けながら、レンはゆっくりと油断無く路地へと近付く。

レンがその路地の真正面に來ると、咀嚼の終えたそれがこちらに振り向くのはほとんど同時だった。

「何だこいつは!？」

レンの目に写ったのは、敢えて言うなら足の生えた巨大な魚だった。

3 m以上はあるその怪物は、ナマズか深海魚を思わせるような横に伸びた体に全身が鈍く光る鱗と下水でまみれた粘液で覆われ、本来ヒレが生えているはずの場所は、小さなヒレが付いた、まるで爬虫類を思わせる短く太い足が生えていた。

それはレンを見ると、まるで水中を泳ぐように何度か尾びれを動かしながら硬質で覆われた巨大な口を開閉させた。

その中にさつき食われたゾンビの肉片が粘液混じりに浮いているのを見たレンは顔色を変えた。

「！さつきのはこいつか！」

そうつとレンの傍に来たスミスが思わず叫ぶ。

「そのようだな」

レンは刀を抜いて構えながらそれと対峙する。

「問題はこいつが今空腹かどうかだ。そして今までのパターンから言えば……」

突然怪物は大きく口を開いてレンへと襲い掛かってきた。

「ノーだ！」

レンはとつさに横に飛んで怪物をかわす。スミスも慌てて転がるようにその場から離れ、怪物はそのままレンの背後に有った消火栓へと突っ込む。

驚くべき事に、その怪物は口の中へと入った消火栓を強靱な顎で

平然と噛み千切ると、咀嚼して飲み込んだ。

「嘘……」

「随分と悪食だな！」

呆然としているミリィを差し置いて、レンはホルスターからサムライエッジを抜くと、立て続けに怪物に向けて発砲。

だが、さして効いた様子も見せず、怪物は再びレンへと跳び掛かった。

レンは体を沈めながら怪物の方へと前進、その腹へと刀を振るった。

「何！？」

しかし、その刃は怪物の全身を覆う甲殻並の硬さの鱗と粘液によって阻まれ、表面を滑るだけに終わる。

「くたばれエセ魚が！」

スミスが怪物へと向けてモスバークを連射するが、異常に素早い動きを捉えられず、虚しく路面に弾痕を刻む。

そして、モスバークが弾切れを起こすと同時に、怪物はこちらを向いた。

「ゲテモノ好きならこいつを食らえ！」

スミスが腰からレッドホークを抜くのと、怪物が口から粘液状の何かを吐くのは同時だった。

「な！？」

「危ない！」

レンがとつさにスミスに体当たりを掛けて自分も後ろへと転がる。吐き出された粘液はスミスの構えていたレッドホークとレンの足を掠めるだけに終わった。

「スミス大じょう…」

言葉の途中で、レンが突然足に走った激痛に言葉を詰まらせる。見ると、粘液がかすった所が醜くただれていた。

「こいつは！」

スミスが手にしたレッドホークの表面が融解していくのを見て絶句する。

怪物が吐いたのは強い酸性を帯びた粘液だった。

怪物はその粘液をまるで啜るようにまた口の中へと戻す。

「悪食の上に貧乏性か。キレイに舐めないと気が済まないらしい」

レンが足に走る痛みを我慢しながら立ち上がる。

「二人共大丈夫！？」

ミリィが二人の傍へと近寄ると、怪物に向けてクーガードを構えたが、レンはそれを制した。

「あいつにそんなちやちな物は効かない。効くとしたら」
「こいつだ！」

スミスが融解したレッドホークを投げ捨て、背中に背負っていたM77マーク2を構えると、怪物の顔へと向けてレーザーポインタを照準、トリガーを引いた。

が、発射された弾丸が当たるよりも速く怪物が動きだし、しばらくして離れた場所に着弾して小さな火柱が上がる。

「おとなしくしやがれ！」

スミスはボルトアクションで空薬莖を排莖、次弾を装填して続けたに撃つが、動きが速すぎてやはり当たらない。

怪物は三人の数m手前まで近付くと、再び大きく口を開けて襲い掛かる。

「散れっ！」

レンが叫びながらミリィを突き飛ばし、自分も横へと飛び退る。

「きゃっ！」

「うわああ！」

怪物は慌ててしゃがみこんだスミスの頭上を通過し、さっきまでミリィのいた場所を襲うと素早くその場を離れた。

「このやろっ！」

スミスが振り向き様にM77マーク2を撃つが、怪物の傍を掠めるだけで当たらない。

（どうする？どうすればいい？）

レンは自問しながら怪物を見た。
怪物はある程度離れるとUターンしながらまたこちらへと向かってくる。

（一瞬でいい。あいつの動きを止められれば……………）

近付いてくる怪物から視線を合わせたまま、周囲を観察した。
そして視界の隅に、路上に落ちているマンホールのフタが有るのに気が付いた。

（あれだ！）

「危ないレン！」

「レンっ！」

そちらに気を取られている隙に、間近まで近寄った怪物が再びレンを襲った。

「はっ！」

レンは体を捻りながらそれをかわし、怪物の腹へと刀の峰を叩き込む。

怪物はそのショックで態勢をやや崩しながら地面へと降りるが、すぐに何事も無かったようにこちらへと向き直った。

「スミス、オレが奴の動きを止める。その間に撃ち込め」

「どうやってだよ」

「説明してるヒマは無い。なるべくオレから離れている」

有無を言わせず、レンは構えていたサムライエッジをホルスターに仕舞って両手で刀を下段に構えた。

そのままゆっくりと怪物と対峙しながら路上に落ちているマンホールの方へと近寄る。

（こっちだ………飛び掛かるには近いぞ………またあれを吐いてこい………）

レンの思惑通り、怪物はゆっくりとレンの方へと向き直ると、大きく口を開けた。

（そうだ、来い！）

次の瞬間、怪物は口から酸性の粘液を吐いた。が、それはレンの狙っていた通りだった。

（今だ！）

怪物が粘液を吐くと同時に、レンは足元に有ったマンホールのフタの端を刀で跳ねあげ、それを掴んで粘液へと突っ込んだ。

小さめのフタだった為、覆いきれない部分を粘液が襲うが、構わずレンは粘液を突っ切る。

「はああああああ！」

そのまま怪物へと走り寄ると、怪物の体で数少ない鱗で覆われていない部分、背ビレの付け根の極僅かな隙間へと刀を突き刺し、そのまま路面へと突き刺した。

「今だっ！」

「OK！」

刀を手放して怪物から離れたレンの背後から、スミスが弾丸を撃ち込む。

装甲目標の内部破壊を目的に作られた徹甲焼夷弾が硬質の鱗を突き破り、怪物の体内へと炎を撒き散らす。

束縛から逃れようと怪物はもがくが、深々と突き刺さった刀がそれを許さず、次々とその体に弾丸が撃ち込まれる。

5発目が撃ち込まれ、怪物がほとんど動かなくなったのを確認しながらスミスは構えていた銃を降ろした。

「やったか……………」？」

「多分な」

怪物の焼ける生臭い匂いがたち込める中、レンは怪物が最早微かにしか動かないのを確かめ、その背を貫いていた刀を手に取り一気に引き抜いた。

「いつつ……………」

刀を引き抜いた反動で、マンホールのフタで覆いきれなかった部分が痛み、レンは思わずその場に尻餅をついた。

「大丈夫！？」

ミリイが慌てて駆け寄り、レンの傷の具合を確かめる。

マンホールのフタを掴んでいた左手の指と、右足の脛、それに左足の太腿が酸性の粘液の為にただれていた。

「早く傷口を洗淨しないと！」

「水ならそこに！」

スミスが先程怪物が食い千切った消火栓を指差す。そこからは噴水の様に水が吹き出していた。

「一汗かいた所だしな。シャワーでも浴びるか」

レンがミリイの肩を借りて噴水の傍へと近付いた時だった。

突然、死んだように動かなかった怪物がレン達へと襲い掛かった。

「あぶ……」

「え……」

スミスの声でミリイが振り返るよりも速く、レンは後ろへと振り返り、振り返る勢いを利用しながら怪物の体に開いた弾痕の一つに刀を突き刺した。

「おおおおおおお……！」

声と共にレンは刀の峰に左の拳を叩き込み、その勢いを乗せながら一気に怪物の体を斬り裂く。

怪物は半ばから二枚に下ろされて路面へと転がった。

「5発も徹甲焼夷弾食らって生きてやがるとはな………」

スミスが完全に死体と化した怪物を気持ち悪そうに見る。そして不思議そうにレンの方を見た。

「何でまだ生きてるって分かったんだ？」

「勘だ」

レンが刀を振るって鞘へと収めながら短く答える。

「フォースにでも目覚めたか？」

「似たようなのなら従兄が目覚めている」

レンは消火栓から吹き出している水で傷口を洗い流しながらの答えに、スミスが首を傾げる。

「それにしても、結局こいつ何だったんだ？こんなでかい魚ここいらにいなえし……」

「多分肺魚の一種だと思うけど……」

「ハイギョ？」

傷の手当ての準備をしながらのミリイの言葉に、今度はレンが首を傾げた。

「主に熱帯地方に住む変わった魚で、浮き袋の変化した擬似的な肺を持っているのが特徴よ。それのお陰で短時間なら陸上行動も可能なの。ペットとして飼われる事も在るからそれが変化したんだと思うわ。だけどここまで大きくなったりしないはずだけど……」

「じゃあこの強力なゲロは？」

スミスが路面を侵食している粘液を指差しながらの問いに、ミリイはしばし考え込んで答える。

「肺魚は食べた物を一度強靱な顎で砕いて、それを胃の粘膜と一緒に口から出して反芻する習性があるから、多分その名残だと……」

「ま、今となっちゃどうでもいい事だ。分かっているのはこいつが襲って来たっていう事実と、刺し身じゃ食べそうにない事だけだ」

レンが呆れたような声を出しながらミリイの方へと左手を突き出

す。

ミリイはそれに救急スプレーを吹きつけ始めた。

「ねえ、レン。サシミって何？」

「知らないのか。刺し身ってのは……」

レンの言葉が途中で途切れる。

不信に思ったミリイにもすぐに原因は分かった。

「おい、聞こえるか!？」

「ああ、幻聴じゃないようだ」

どこか遠くから車の駆動音がこちらへと近付いて来ていた。

見ると、通りの向こう側から一台の車が向かってくるのが見えた。

「助かった……………の？」

「あれに乗っている奴にその意思があればな」

レンが訝しげな顔をする。車種を確認出来る距離までそれが近付くと、スミスが意外そうな顔をした。

「ハンマーじゃねえか。何でこんなところに？」

その車は米軍正式軍用車両の一つだった。

目前まで来ると、その車は停止し、中から重武装した兵士達が降りてきた。

降りてきた兵士はまず三人を順番に見、次に路面に転がっている怪物の死体を見た。

「これは君達が倒したのか？」

「そうだ。苦労したかな」

威圧的な兵士の言葉にレンがこちらでも威圧的に答える。

「見た事も無いタイプだ。新型か？」

「分らん。取り合えずサンプルを回収しよう」

こちらを無視して他の兵士達は怪物の死骸を調べ始める。
それを横目で見ながらスミスがわざと大きな声でばやいた。

「出来れば負傷した民間人を助けてほしいんだけどな」

それを聞いた兵士の一人が車の無線を使って何かを話し合う。
やがて話が付いたのかこちらを向いた。

「了解した、君達を保護しよう。この車に乗りたまえ」
「それはどうも」

わざとらしく言いながらも、スミスはミリイと共にレンに肩を貸しながら車へと乗り込む。

三人が車に乗り込んだ所で、兵士達は車のトランクから棺桶を思わせるようなカプセルを取り出すとそれに怪物の死体を押し込んでいく。

「何やってんだ、ありゃ？」

「サンプルの回収って言ってたけど……………」

「なるほど、そういう目的か」

「え？」

レンのぼそりとした呟きに、レンの左手にテーピングで応急処置

をしていたミリィが首を傾げる。

「あいつら多分非公式の特殊部隊だ。妙な事は以後喋らない方がいいかもしれないぞ」

『？』

レンの言葉にスミスとミリィは顔を見合わせてクエスチョンマークを浮かべる。

そこヘトランクにカプセルを詰め込んだ兵士達が車内に乗り込み、車を発進させる。

彼らが放つ威圧感に気圧されてスミスとミリィは黙るが、レンは用心深く彼らを観察する。

（M4カービンにM203グレネード？オマケにナイツ社製の最高級品か……………こいつら間違い無く一般兵じゃないな）

レンはちらりと背後のトランクを見た。そこには先程のカプセルと同じ物がもう一つ置いてあり、そこには巨大な虫のような物が入っている。

そしてその隣にはロケットランチャーや重機関銃といった物騒極まりない代物がごろごろしていた。

（ステインガーにM60、どっちもテロリスト相手でも使わないような代物だな。やっぱりこいつら……………）

「ちょっと聞きたいんだが」

そこで突然声を掛けられたレンの思考が中断する。

「先程の怪物は、君が斬り殺したのか？」

「結果的にはそうなるな」

「あれを？どうやって？」

声を掛けてきた兵士とは別の兵士が興味半分と言った顔でレンの方を向いた。

「光背一刀流《残陽刻》^{ねんやういく}という技だ。本来は斬鉄、すなわち金属や岩石を両断する技なんだがな」

「金属？その二ホントウで？」

「ああ。オレはまだ未熟だからそこまで出来ないがな」

兵士達がキョトンとした顔でお互い顔を見合わせると、小声で何かを話し合う。

聞き耳を立てなくてもそれが先程自分が言った事が本当かどうか疑っているのはレンには容易に想像できた。

「言っとくけど、こいつはすげえ強いんだ。ここまで来るのに何体ものゾンビや怪物を斬ってるんだぞ。本物のサムライだ」

「そうですよ、レンは強いんですよ」

レンを弁護しようとするスミスとミリィに兵士が苦笑を返そうとした時、突然車のルーフに振動が響いた。

「どうした！？」

「やばいぞ、取り付かれた！」

ハンドルを握っている兵士がスピードを上げ、ジグザグ走行をしながらルーフに取り付いた何かを振り払おうとするが、それは落ちる素振りすら見せず、逆にルーフを猛烈に叩き始める。

「くたばりやがれ！」

兵士の一人が真上に向けてM4カービンのトリガーを引くが、頑丈すぎる構造が災いして弾丸はルーフにめり込むだけで貫通しない。

「ちっ！おい車を止め…」

そこで、兵士の眼前に細長い何か突き出される。

それが刀の鞘である事に気付いた時、レンは狭い車内で強引に抜刀していた。

「あああああ！」

レンは体を沈み込ませるようにして刀を真上に向けるとそこから一気に跳ね上がるように刀を突き出した。

刃はライフル弾をも通さなかったルーフを貫通し、その上にいた何かを貫いた。

真上から奇怪な断末魔が響き、レンが強引に刀を引き抜くとルーフから何かが車の後ろへと落ちていく。ミリイが何気に後ろを見ると、それはもう一つのカプセルに入っていた巨大な虫だった。

「これで、信じてもらえるか？」

「ああ……………」

兵士の一人が驚愕の表情でレンを見つめていた。他の兵士達も啞然とした表情を浮かべている。今何が起きたのか理解するのに苦労しているらしい。

「サ、サムライ……………」

「これが……………」

「少し違うかな」

レンは刀に付いた奇怪な色の血をペーパータオルで拭いながら、不敵な微笑を浮かべる。

「お陰で説明に苦労しそうだよ、サムライボーイ」

助手席に座っていた兵士が足元に落ちていた鞘を手渡しながら苦笑を返す。

「見たままを伝えればいいさ。それがあんたらの任務だろ」

レンの言葉に兵士達の顔に緊張が走る。そこでちょうど車は停止した。

「到着だ」

「これは……………」

そこで広がっている光景を見たレン達は思わず絶句するしかなかった……………

第七章

車に乗って三人が案内された場所は、さながら戦場の最前線基地を思わせる場所だった。

幾つもの軍用車両や戦車、軍用ヘリに至るまでがあちこちに並び、ベースキャンプ用のテントが無数に立っていた。

レンの傷の治療を終えた後、彼らは兵士に連れられてある一つのテントへと案内された。そこには、コンピューターや通信機に囲まれた中に、明らかに他の兵士とは違う雰囲気の方が一人いた。

「サー、街で保護した三人を連れてまいりました」

「御苦労。後は下がってください」

「イエス、サー」

案内した兵士がいなくなったのを見計らってから、その男はレン達の方へと向き直った。

「私はこの場の指揮官のケヴィン少佐だ。君達に二、三聞きたい事が有ってこの場に呼んだ」

「ちょうどいい。こつちも聞きたい事が有る」

（おいレン……………）

あからさまな警戒心を剥き出しにしながら、包帯に包まれた左腕を三角巾で吊るしたレンが答える。

スミスが小声でそれをたしなめるが、レンはその態勢を解こうとはしなかった。

「いいだろう。国家機密に触れない程度ならば答える事にしよう。まず君達の名前と身分を教えて欲しいのだが」

「ミズサワ レン。高校生でこの街には半年前に日本から来たばかりだ」

「スミス・ケンド、同じく高校生で家は銃砲店をやってる」

「ミリア・マクセル。二人のクラスメートで父はラクーン総合病院で医師を、母は看護婦をしています」

三人の返答を聞きながら、少佐は傍にいた兵士に目配せした。それを受けた兵士はコンピューターに何かを打ち込み、しばらく後に少佐に無言で首を縦に振った。

「よろしい。次に君達は街で何を見てきた？」

「何もかにも有るかよ、街中化け物と死体だらけだ。何で軍が突入して掃討しないんだ！」

今度はスミスが声を荒げて言うのをレンが制止した。

「オレも同じ事を聞きたい。何で軍は街を包囲しているだけなんだ？それとも街に突入出来ない訳でも在るのか？」

「生憎とその質問には国家機密で答える事が出来ない」

「何だと!？」

首を横に振りながらの少佐の返答に、スミスが掴みかかろうとするのをレンが肩を掴んで止めた。

「国家機密はこの国で一番効力がある。と日本で聞いたのはどうやら本当みたいだな」

皮肉の入ったレンの言葉に、少佐が無言で肯定する。

「国家機密もクソもあるか！あそこにやオレの親父が残ってるんだ！早いとこ救助に行ってくれ！」

「残念ながら、昨日付けを持って市民の生存は絶望と見なされ、救助は打ち切られている。君達は非常に運がいい」

「何い！！」

スミスが暴れそうになるのを今度はミリイも一緒になって止める。右腕だけでスミスを押さえながら、レンは少佐へと向き直った。

「それじゃあなんでオレ達を見つけた兵士達は外れの方とはいえ街を巡回していたんだ？」

「偶然君達の戦っていた銃声を聞いた者がいてな、すぐ傍のようだから救助に向かわせた」

「嘘だな」

レンは断言。少佐はほとんど表情を変えずに聞き返してくる。

「なぜそう言えるのかな？」

「あの兵士達はオレ達ではなく、怪物の死体の方に用が有った。あんな達はこの街を封鎖するためでなく、この街でどんな怪物が発生しているのかを調べる為に来たんじゃないのか？」

「面白い説だが、決め手には欠けるな」

鼻先で笑い飛ばす少佐に、レンは証拠を並べ始めた。

「まず、オレ達が出会った兵士達も、そしてここにいる兵士達も重武装過ぎる。ほぼ全員がランチャー系の武器を装備していたが、ノーマルの銃を持っている奴を探す方が難しいというのは軍隊じゃ異常

だ。次に乗っている車もほとんどがハンマーや装甲車のような密閉出来る車が多い。これは何かが車の中に入るのを防ぐ為じゃないのか？最後に、軍人なら一番最初に所属部隊を名乗るはずなのにあなたは名乗らなかった。これはあんたが名乗る事を許されない部隊に所属している証拠に他ならないんじゃないのか？」

ここまで言ってから、レンは相手の顔を伺う。

少佐の顔には表情らしい物が何時の間にか消え失せ、ただ冷静過ぎる程の鉄面皮が残った。

それを見ながら、レンは確信を言った。

「ひょっとして、この件には軍が何らかの形で関与しているんじゃないのか？そして事が公にならない内に内密に処理しようとしている。違うか」

「国家機密だ、答えられない。だが、軍が関与していないという事だけは断言出来る」

「関与してはいなくても、便乗はしているんじゃないのか？」

レンの最後の一言に、少佐の顔が微かに変化したのにミリイは気付いた。

少佐はそれを悟られまいとする為か、三人に背を向けた。

「もう君達に聞くべき事は無い様だ。君達がこの件について一切公言しないというのなら君達の身の安全は保障しよう」

「街一つが死に絶えようとしているんですよ！それを黙ってみす…」

ミリイの言葉を、レンが口を塞いで止めた。それでも何かを言うとするミリイにレンは目配せをしながら首を横に振った。

「街中の人間がゾンビになった、と言って信じる人間はホラー映画

かXファイルの見過ぎだと思っがな」

「確かに」

少佐が背中越しに微かに笑うのを聞きながら、レン達はテントを出ようとするが、その途中で少佐に呼び止められた。

「最後に一つ聞きたい」

「何だ？」

訝しげに振り返るレンに、少佐は背を向けたまま続けた。

「レン、だったか。君はその二ホントウでここまで生き延びてきたのかね？」

「……………そうだ」

少佐が背を向けたまま微笑する気配が伝わる。

「まさか現代の、しかも我が国にサムライがいるとは思わなかった。是非とも私の部下に欲しいね」

「生憎と国家に服従出来る程純粋な人格はしていない」

「そうか、残念だ」

レンはそのまま何も言わずにテントから外へと出た。

三人がいなくなっからしばらくして、少佐は硬い口を開いた。

「あのレンという少年のデータを徹底的に探れ。大至急だ」

「なあ、オレ達は何時になったらここから出してもたえるんだ？」
「さあな」

「もお丸二日は経ってるんだぞ」

飯の寝床として提供されたテントの中を、スミスはせわしなく歩き回っている。

部隊の撤収の際に同行させるとの説明を受けてはいたが、この二日間でその様子は全く無かった。

「ちつくしょう、あのアーミー連中ホントにオレ達助ける気有んのか？」

「機密保持の為に殺されるかもね」

簡易ベッドの上でひざを抱えてうずくまっていたミリィがボソリと言った一言に、スミスの動きが止まる。

「これだけの大事件だもの、ケネディ暗殺事件みたいに目撃者は全員殺される可能性も在るかも……」

「冗談じゃねえ！オレはぜってえ死なねえぞ！こんな所で死んだら親父に天国で殴られる！」

「落ち着けスミス」

簡易ベッドの端を殴りつけながら叫ぶスミスをレンがたしなめる。この二日間、ずっと落ち着きの無いスミスと、ずっと落ち込んでいるミリィをレンが何とかなだめる状況がずっと続いていた。

「それにこれは多分隔離よ。あたし達がゾンビにならないかどうか確かめてるんだわ。そうしたら労せず新鮮なゾンビがサンプルとして手に入るもの」

「生憎とこの中でどっか腐れてきたり、生肉を食いたがっている奴はいないがな」

「そうね」

レンが皮肉混じりに言うのを聞きながら、ミリイは微かに笑った。それを横目で見ながら、スミスは舌打ちしつつ自分の拳を手の平に叩きつける。

「クソ！せめて銃が取り上げられてなけりや車なりへりなり強奪して逃亡すんだけどな」

「車はともかく、へり強奪した所でどうやって操縦するんだ？オレはへりの操縦なんて知らんぞ」

「あたしも知らない」

「う……………」

妙な所で受けた突っ込みに対する返答を思いつかず、スミスは明かり取り用の窓から外を見た。

ふと、そこに見た事も無い物が運搬用へりから降ろされているのが目に入った。

「おい、ありや何だ？」

「何がだ？」

簡易ベッドに横になっていたレンがスミスの脇から外を見た。そこには巨大なトンネル掘削機にも似た妙な機械と、それに附随している幾つもの機械やバッテリーを降ろしている所だった。

「何だよありや？軍の秘密兵器か？」

「オレには波動砲に見えるが」

「何それ？」

「日本人にしか通じないか……………」

レンの脇からミリイも外を覗き込み、そこに見えた物に絶句する。

「ひょっとして、電子収束器？すでに実用化されてたなんて……」
「電子収束、って事はあれはプラズマ兵器か……さすがアメリカ、SF兵器がすでに開発済みとはな」
「何なんだよ、その電子収束器って？」

首を傾げるスミスに、ミリイが説明する。

「前に資料で見ただけなんだけど、閉鎖された空間内を電磁波で満たして、人為的に任意粒子を荷電粒子に変化させる物よ。多分あれはその荷電粒子を、磁界を利用した電磁力タパルトで撃ち出すレーザガン的一种、だと思うけど」
「頼む、もう少し分かりやすく……」

ミリイの説明に頭を抱えているスミスに、レンが呆れながら補足した。

「平たく言えばSF映画に出てくるプラズマカノンとかいったのと同じ代物だろ。オレが知ってるのは日本のSF小説で巨大ロボットが使っていた代物だがな」

「……ようは一般公開すらされていない秘密兵器だな」
「そういう事だろ」

恐ろしい程単純な解釈にレンだけでなくミリイも呆れかえる。
が、スミスはそれで何とか理解したらしく、妙に納得した表情をして何度も頷いていた。

「問題は、あれが実戦用の代物だとしたら何に使う気だ？ゾンビ相手にしては大物過ぎる……」

「ゾンビ相手じゃなきゃ、あのカメレオン男か、怪物魚にでも使う

んだろ」

「そうか？そудとしても威力があり過ぎるような気が…」

明かり取りの窓から見える範囲内に消えたレールガンの消えた方向を見ながら、レンは自問する。

無論、答えは出る訳は無かった。

「オンミヨウジ？」

手元のファイルを見ながら、聞いた事の無い言葉に少佐は首を傾げた。

それはレンについて調べ上げたレポートだった。

生年月日、身体データ、家族構成、学歴、その他を余す所なく調べあげた物だったが、一箇所だけ妙な所があった。

母方の家族構成を示す欄に、その妙な言葉が書かれていた。

添付されている資料に目を通していく内に、少佐の顔はどんどん複雑な物へと変わっていく。

「ゴーストバスター？彼はその訓練を受けているというのか？」

絶対現実主義である少佐にはどうにも信じられないような事ばかりがそこには書き記されていた。

そして、レポートの最後には早急に彼の身柄を解放するようにとの軍上層部からの勧告が書かれている。

「……………信じられん。だが……………」

街の中を探索していた班から、彼が斬り殺したらしい変異体の報告は受けている。

だとしたら、彼の戦闘力は下手な兵士やあの怪物達よりも遥かに上回る事になる。

純粋な興味本位から少佐はレンの戦いを見てみたいと思った。が、上層部からの指示を無視する訳にはいかない。

「タレス少尉」

「は！」

「先日保護した三人を先程到着した輸送ヘリにて基地まで護送するように」

「イエス、サー」

命令を受けた兵士がテントから消えると、少佐は深い溜息をつく。

「モンスターと戦う運命にあるとでもいうのか？サムライボーイ……」

……」

先程見た物についてレン達が論議していた所に、テントの中に一人の兵士が入ってきた。

「君達、あの輸送ヘリに乗りなさい。基地まで帰投するついでに乗せていくそうだ」

「やれやれ、待ちくたびれたぜ」

わざとらしく言いながらスミスが外へと出る。それに続いてレンとミリイも外に出た時だった。

「あん？今度は何だ？」

「何が……」

何がだ、と言い終えるよりも早く、レンもそれに気がついた。スミスの視線の先には、幾つもの大きなタンクを吊るしたヘリがこちらへと近付いて来ていた。

「とうとう毒薬でも撒く事にしたのか？」

「馬鹿な、そんな話は聞いていない。それにあれは……」

兵士の言葉の途中で、真上まで来たヘリが突然タンクの一つの中身を彼らの間近へと投下した。

タンクから投下されたそれは、轟音と共に地面に小さなクレーターを作り、跪いた状態からゆっくりと立ち上がった。

「何だこいつは！？」

それは、分厚いコートを着込み、死人の顔色をした巨人だった。巨人は、ゆっくりと周囲を見渡すと、間近にいた兵士を見つけて拳を振り上げた。

「て、敵しゅ……」

叫びながら銃を向けようとした兵士は、顔面に強力なパンチを貰い、地面へと叩き付けられる。そして、地面にゆっくりと血の染みが広がっていった。

「い、いやあああああ……！！」

「逃げろ！」

その光景を間近で見てしまったミリィが悲鳴を上げると、巨人はゆっくりと彼女の方を向いた。それに気付いたレンが彼女の手を取って慌てて巨人から離れる。

「敵襲！敵襲だー！」

「こつちもだ！誰か来てくれー！」

「慌てるな！間近にいる者は各自独自の判断で対処しろ！第一、第二小隊はベースキャンプ付近、第三、第四はコンテナ付近にいる敵に対処！第五小隊はレールガンの起動を急げ！」

へりから第二、第三の巨人が次々と投下され、その場は悲鳴と怒号、そして命令と銃声が飛び交う戦場へと様変わりした。

「こつちにもいるぞー！第四小隊は輸送へり前にいるTに対して攻撃を開始！」

逃げ惑うレン達の傍で、兵士達が巨人に攻撃を開始する。

次々と撃ち込まれるM4カービンのライフル弾とアタッチメントのM203グレネードのグレネード弾が瞬く間に巨人を蜂の巣にすると、巨人はゆっくりと地面に倒れ伏した。

「倒した………のか？」

余りの呆気なさにスミスが咂然としている傍で、兵士達は銃を構えたまま巨人の包囲を徐々に縮めていく。

包囲が巨人の間近まで迫り、兵士の一人が生死を確認しようとした時だった。

突如、巨人は起き上がると生死を確認しようとしていた兵士を殴り飛ばす。

殴り飛ばされた兵士の巻き添えを食った兵士達が地面へともつれて倒れると、残った兵士達が慌てて銃を巨人へと向けようとした。

「攻撃さいか……」

号令を掛けようとした兵士へと向けて、巨人が持ち上げた両の拳を組み合わせて振り降ろす。一撃で頭を砕かれた兵士はゆっくりと地面に倒れた。

「う、うわあああああ！」

「ひiiiiiiii！」

残った兵士達が半ば恐慌状態になって無茶苦茶に銃を撃ちまくる。だが、巨人はさほど気にも止めないように残った兵士達に近付くと、それをまるでボール遊びのボールの様に軽々と殴り飛ばした。

「きゃあ！」

殴り飛ばされた兵士がレン達のすぐ傍のコンテナへと叩きつけられ、ミリイが短く悲鳴を上げる。

ふと、その拍子に僅かに開いたコンテナの中に自分達の武器が有るのにレンは気付いた。

「受け取れスミス！」

「おうよ！」

レンはスミスに向けてM77マーク2を放り投げると、自らも左腕を吊っていた三角巾を解き、ガンベルトを腰に巻いてそれに刀を差した。

「こつちだ、ハゲ野郎！」

スミスが巨人に向けて発砲、巨人がそちらを向いた隙にレンは背後へと忍び寄り、その背中へと向けて居合いで斬りつける。

しかし、一撃必殺のはずの刃は巨人のコートの表面を斬り裂くだけに終わった。

その切断面が複層になった繊維と細かな鎖で構成されているのをレンは見た。

（ケプラーにチェーンメイル！？防弾仕様か！）
「スミス！こいつのコートは防弾だ！頭を…」

言葉が途中で途切れる。振り向いた巨人がレンの胴体へと向けて強力なラリアットを食らわせた為だった。
レンは自分の胸から肋骨が砕ける音が妙にハッキリ聞こえた気がした。

「レン！」

「レーン！」

「来る……な」

叫びながらこちらに走って来るミリィをレンは止めようとしたが、口から溢れた鮮血で言葉は呟き程度にしかならなかった。

「よくもレンを！」

怒りに燃えたスミスが次々とM77マーク2を連射。
が、冷静さを欠いている為かそのほとんどが巨人の胴体に当たる。

「死ね！この野郎！」

スミスが悪態を付きながら一度冷静になろうとした時、巨人はすでに彼の目前にいた。

「しまっ……」

自分の失態をのしりながら、スミスは自分に振り下ろされようとしている鉄槌から逃れる為に体を捻った。

何とか頭への直撃は避けたが、鉄槌はスミスの左肩へと直撃した。

「がつ！？」

「スミス！いやあああああ！」

左肩を押さえて倒れ込んだスミスを見たミリイが悲鳴を上げる。それに気付いた巨人は今度はミリイの方へと近寄って来た。

「いや！来ないで！あっちに行つて！」

泣きながらミリイはコンテナから見つけたクーガードを巨人へと向けて連射するが、巨人は平然と近寄ってくると彼女の首を掴んで持ち上げる。

しかし、その腕は巨人の胸の辺りまで持ち上がる前に突然停止した。

「させるか……………」

何時の間にか立ち上がったレンが、その腕に刀を突き刺していた。巨人はミリイの首から手を離し、レンの方を見て自分の腕に突き刺さった刀に気付くとその腕を捻った。

腕の捻りと同時に、妙に鈍い音を立てて刀の先端がへし折れる。

「な、長船が……………」

折れた刀を呆然と見つめていたレンが、こちらに巨人の拳が向け

られているのに気付く。

慌てて逃げようとした途端、銃声と共に巨人の体が揺れた。

「ゲームセットにやまだはええぜ……………」

銃声のした方角を巨人が振り向くのを追ってレンが見たのは、片腕だけでM77マーク2を構えているスミスの姿だった。

力無く下がっている左腕の代わりに、スミスは口で強引にボルトアクション、次弾を装填すると巨人の頭部目掛けてトリガーを引いた。

巨人の側頭部に徹甲焼夷弾が命中、巨人の体は大きく揺れる。

それを見たレンが折れた刀を頭の上まで持ち上げ、刃を上に向け地面と水平になるように構える。

その状態で胸に走る激痛を無視するように意識して大きく息を吸う。

そして、気合と共に跳ね上がりながら巨人の額へと刃を振り下ろした。

「はあああああ！」

刃は巨人の額をかち割り、頭部の半ばまで斬り裂く。

巨人はしばらくその状態のままだったが、やがてその体は大きく揺れ、地面へと倒れ伏した。

巨人の頭部から流れる血が血溜まりを作っていくのを見ながら、レンは刀を鞘に収める。

そのまま倒れそうになるのを脇からミリィが支えた。

「何とかなっただか……………」

「喋っちゃダメ！肋骨が折れてるわ。下手したらどこか内蔵に刺さってるかも」

ミリイに支えられながら、レンは輸送ヘリへと歩み寄る。

「へっ、うらやましいな。オレにも肩貸してくれるかわいい女の子が欲しいぜ」

スミスがM77マーク2を杖代わりにしながら、自分もヘリへと乗り込んだ。

『ジェネレーターが破壊されました！レールガンが作動不能です！』

「バッテリーからの供給に切り替える！」

『バッテリーからの供給だと発射可能までに時間が掛かります！』

「構わん！発射可能までの時間を算出しろ！」

突然の襲撃に半ば混乱状態に陥りかかっている部下達に無線での確な指示を出しながら、少佐は刻一刻と悪化していく状況に焦りを感じていた。

（Tタイプ四体同時襲撃とはな。思い切った事をする……………）

焦りを顔には出さず、小さく歯軋りしながら少佐が被害状況を副官に問おうとした時、突然一人の兵士が慌てながらテントの中へと入ってきた。

「第二カーゴヘリ、破壊されました！サンプルと共に現在延焼中！」
「なんだと！？」

少佐が思わず驚愕の声を出した瞬間、テントの布を突き破り巨人が中へと入り込んできた。

「とうとうここまで！」

デスク上のパソコンで戦況分析をしていた副官が驚きながらもホルスターに手を伸ばす。

だが、腰の銃を抜くよりも早く巨人が副官を殴り飛ばし、副官の体は通信機器等が積み重なった場所へと叩き付けられ、更にその体に崩れた通信機器が駄目押しとなって降り注いだ。

「大尉！」

少佐が慌てて副官の傍に近寄り、その体を助け起こす。

「お逃げください、少佐！」

先程テントに入ってきた兵士がM4カービンを巨人へと乱射しながらこちらへと注意を引き付けると、巨人を誘導しながら外へと走り出す。

「……………やむをえんか」

苦渋に満ちた顔をしながら、片手で副官を助け起こしながら少佐は通信機のスイッチを入れる。

「総員に通達！ベースキャンプは廃棄、総員撤収せよ。繰り返す……………」

『ベースキャンプは廃棄する！総員撤収せよ！繰り返す！ベースキャンプは廃棄！総員撤収せよ！』

今だあちこちで銃声の飛び交う中、撤収命令が兵士達の間に飛び交う。

それを聞いた兵士達が暴れ狂う巨人に弾丸を撃ち込みながら次々と撤収を始める。

レン達の乗りこんだヘリにも続々と負傷兵が乗り込み、やがてハッチが閉じられると、ゆっくりとその巨体が飛び上がった。

「これが完成された生物兵器の威力が……」

別のヘリから、眼下で展開されている地獄絵図を見下ろしながら少佐が呟く。

その体には真新しい血痕が付いているが彼はそれを気にも止めずにポケットをまさぐり、1枚のMOディスクを取り出す。

「アレだけの被害を出しながら成果はこれだけか。サンプルを破壊されたのは懲罰物だろうな」

「でも、これであいつらの出鼻をくじければ……」

隣に座っている副官の言葉は怪我の激痛に途切れる。

その額からは血が滲み出し、足は明らかに異様な方向を向いていた。

「そして、これからは兵士ではなく痛みも感情も持たない生物兵器の時代が来るわけだ。我々も無用となる」

大佐の言葉に副官が痛み以外で顔を歪める。

「はたして本当に最後まで戦えるのは人なのか、やつらなのか……」

「どうやらようやく助かったみたいだな」

「ああ……………」

「二人共喋らないで。重傷なんだから」

「はいはい」

「分かっている……………」

ミリイの施す応急処置を受けながら、二人は苦笑した。

ふと、レンはガンベルトのパウチに小さな水筒が入っているのを思い出し、それを取り出した。

「何それ？」

「街から無事脱出出来たら祝杯を挙げようと思ってな、持ってきた」
「そういや有ったな、そんなの」

レンが水筒のキャップを外そうとするが、胸に激痛が走り、自分で開けるのを断念するとミリイにそれを手渡した。

「すまんが開けてくれないか」

「祝杯って、これお酒！？ダメよそんな状態で飲もうなんて……………」

「別にいいだろ。昔は酒を痛み止めに使ったって親父に聞いた事有るぞ」

「もう……………」

ミリイが渋々ながらキャップを開け、中身をそれに注いでレンへと手渡した。

レンはそれを一口飲むと、スミスへと手渡す。残りをスミスは一息で飲んでしまった。

「おい、高い酒なんだから味わって飲め」
「いいじゃねえかよ、まだあんだろ」

レンは顔をしかめながら、傍の窓から見える遠ざかっていくラインシティの町並みを見ていた。
半年しかいなかった街に別れを告げながら……………

それは、自分の魂の灯火が徐々に小さくなっていくのを感じていた。

その生命に対する執着心なぞは無いに等しかったが、その体は別だった。

生命の灯火が消える寸前、その体に掛かっていた全ての拘束が解放された。

途端、その体は生きる為に急速的に変化していった。
体を覆っていたコートは膨張する体の圧力に耐えかね弾けとび、手には獲物を狩る為の長い爪が生えていく。

最早生命の危険性など消え失せたそれは、再構成されていく頭部で飛び立とうとしている輸送ヘリを見た。

そこに、自分が狩るべき獲物がいる事を本能的に感じると、それは高々と跳躍してヘリのハッチへとしがみついた。

バキン。

「何だ？」

ヘリのハッチから聞こえて来た音にレンは首を傾げる。

「誰か外にいるんじゃないの」

「馬鹿ね、そんな事在る訳が…」

ミリイの言葉の途中で、再び同じ音が聞こえる。何かと中にいた人々が注目する中、ハッチの隙間から長い爪が入り込んできた。

「まさか……………」

「そんな……………」

その場にいる全員が硬直しながらその様子を見ていた。やがて、爪はハッチを強引にこじ開けようとし、その力に耐えかねたハッチが異音と共にひしゃげる。

そこから更に凶悪な姿に変貌した巨人が入ってきた。

体は先程よりも一回り以上も大きくなり、右手には先程ハッチをこじ開けた巨大な三本の爪が生え、レンが斬り裂いた頭部は肉が蠢き、やがてそこに巨大な三番目の目が構成された。

「おいおい、延長戦が有るなんて聞いてねえぞ……………」

「ルールを知らないんだろ」

青ざめた顔でスミスが呟きながら、M77マーク2を構える。

レンもミリイを背後に匿いながら刀に手を伸ばした。

途端、異形と化した巨人が先程とは比べ物にならないスピードで兵士達には目もくれずレンの傍へと近寄ると、その爪を振るった。

「くっ！」

レンはとつさに、刀を鞘ごと抜いて両手で爪を受け止める。

が、鞘はそれに耐え切れず刀身の収まっていなかった部分が砕け散る。

「この悪魔め！」

「止せ！人に当たる！」

兵士の一人が異形に銃を向けようとするのを、隣にいた兵士が止める。

「死んでたまるかあああ！」

スミスが外しような無い程の至近距離で異形に弾丸を撃ち込む。だが、最初の一発で無常にも弾切れを起こす。

「レン！」

「ぐうう……………」

異形の怪力の前に、両手でも爪を抑えきれなくなっていくレンが苦渋の表情を浮かべる。

突然、異形は爪を持ち上げると、横から叩きつけるようにレンを襲った。

「ぐあ！」

「レン！」

輸送ヘリの壁に叩きつけられたレンの方を異形が一瞥すると、その背後にいたミリィへと向けて爪を持ち上げた。

「逃げろ……………」

「やらせるか！」

スミスが弾丸の尽きたM77マーク2を棍棒の様にして異形を殴りつけるが、異形は平然とそれを受け止めた。

「い、いやあああああ!!」

ミリイが悲鳴を上げながら、手に持っていた水筒を投げつけ、震える手でクーガードを抜いて連射した。

水筒の中身を頭から浴びた異形は、叩き込まれる弾丸を気にも止めないように爪を振り下ろそうとした。

しかし、偶然その体に叩き込まれた弾丸の一つが、頭部から滴っていた酒を着火させた。

突然頭部が炎に包まれ、異形は相手の位置を知る術を失ってフラフラと辺りをさ迷う。

それを見たレンの脳裏に一つのアイデアが浮かんだ。

「ハッチを開けろ!こいつを叩き落とすんだ!」

「分かった!」

兵士の一人がハッチの開閉装置に飛び付き、それを操作した。

徐々に開いていくハッチを見ながら、レンは怪物の方へと走り寄った。

「ぶつかれええええ!」

「おお!!」

レンを先頭にして、動ける兵士達がアメフトのスクラムよろしくまとまって異形へと突っ込む。

そのままハッチの外へと叩き出そうとしたが、あと一步の所で異形が踏み止まり、自分に突っ込んできた者達を一撃で弾き飛ばした。

「がっ!」

「ぐっ!」

へりの壁に叩き付けられた兵士達の悲鳴がへりの中に響く。
一番前にいた為に図らずも異形の一番傍にいたレンは、体中に響く激痛を堪えながら立ち上がった。

「状況は最悪……………」

日本語で呟きながら、レンは周囲を見渡す。
いるのは傷付いて動けない兵士達ばかりだった。

「状態は最低……………」

呼吸をする度に胸に激痛が走る。
それに呼応するように体中の傷が痛んだ。

「敵は最強……………」

目の前の異形の顔を覆う炎が目に見えて消えていく。
消えれば間違い無く襲ってくるのは嫌でも感じ取れた。

「望み得る限り最悪の状況か……………」

レンは今の自分の状況を冷静に分析する。
武器として残っているのは、残弾が幾つあるか分からないサムライエッジと、刀身が折れ、鞘も半分砕けている備前長船が一振り。

「やれるだけやるか……………」

レンは今使える技が一つだけ有ったのを思い出す。
従兄が一度だけ見せてくれた技だが、難易度は間違い無くA級の技を。

「水沢 練。使うは光背一刀流」

砕けた鞘を腰ために構えながら、意気を鼓舞する為に、名乗る。

「いざ、参る」

今にも異形の顔を覆う炎が途切れる寸前、レンは間合いを一瞬にして詰めながら大きく息を吸い、踏み込んだ足の力を肘を通じて腰へと伝達。

腰からの力を、肩、肘、手首を通じて倍化させ、その力を純粹に刀の柄へと伝えた。

「はあっ！」

気合と共に、柄へと伝えられた力により、固定されていないはずの鞘から、居合い抜きとほとんど変わらない威力の斬撃が繰り出された。

（成功した！）

光背一刀流変位抜刀技《射光》^{いびかり}、固定されていない鞘から居合いを繰り出す秘技。

繰り出された刃は、弾丸をものともしない強靱な筋肉で覆われていた異形の胸を大きく、深く斬り裂いた。

胸を斬り裂かれた異形が消えゆく炎の陰からレンを睨んだ。

それに臆する事無く、レンは斬り裂いた胸の中に動く巨大な心臓を見つけると、傷口からサムライエッジを突っ込み、心臓へと向けてトリガーを立て続けに引いた。

弾丸が発射される度に反動が体中に響く。

最後の弾丸が発射されると、レンはゆっくりとサムライエッジを傷口から抜いた。

傷口から見えた異形の心臓は無数の弾痕が空いているにも関わらず、血を吹き出しながらしばらく動いていたがその動きはゆっくりとなり、そして止まった。

心臓が止まると同時に、異形の体はゆっくりと後ろに倒れ、バランスを崩した体はハッチから外へと落ちていった。

「勝てた、か……………」

落ちていく異形の死体を見ながら、刀と銃を握り締めたままレンも崩れるように倒れ込んだ。

「レン！……………」

「レン……………」

自分を呼ぶ声を何処か遠くに聞きながら、レンの意識はゆっくりと闇に沈んでいった。

作戦報告書

―ラクーンシティ封鎖及び変異体調査における最終報告―

9月27日以降における作戦報告（27日以前の作戦内容は前出の報告書を参考のこと）

27日 11:34

ベースキャンプ近くにて発砲音を確認、変異体調査に赴いていた第4班が現場に急行。

現場にて魚類と思われる変異体の死体とそれと交戦していたと思われる民間人三名を収容。

変異体は交戦していた民間人の日本人少年が所持していた日本刀による刀傷が致命傷との報告があり、銃火器、化学兵器以外での攻撃による変異体の死亡は極めて異例の為、この日本人少年の詳細調査を命令。（調査報告は別記ファイルを参照）

この少年を含む民間人三名の身元を照合の上、負傷の手当ての際に抗体検査を実施。

結果が出るまでこの三名を隔離保護とする。

同日 16:47

調査に赴いていた第3班が変異体との交戦にて二名が負傷。

日増しに変異体はその数を増し、その特異性も変化しつづけていると判断。

上層部に増援、もしくは撤退を進言する。

28日 9:27

前述の民間人三名の検査結果が全員陰性と判明。

以後通常の保護処置へと移行。

同日 14:00

昨日収容した魚類の物と思われる変異体の検査が現場の設備では詳細調査は困難との報告。

ラボへの搬送手続きを申請、他のサンプルと共に特殊コンテナにて後日搬送予定。

29日 18:47

増援要請に伴い、かねてより研究が進んでいたレールガン、“パラケルススの魔剣”が到着、至急設置に取り掛かる。

並びに前述の日本人少年の詳細調査報告が到着。

上層部からの指示により、この少年を含む民間人三名を基地へと帰等予定の第四カーゴヘリにて基地へと搬送するよう命令。

同日 18:55

アンブレラの物と思われるヘリがベースキャンプ上空に飛来。それよりT型BOW四体が当ベースキャンプに降下、破壊活動を開始する。

その攻撃力は極めて高く、我が方の被害は極めて甚大、死傷者多数。

“パラケルススの魔剣”専用ジェネレーターの破壊により即時起動の不能、及び第二カーゴヘリ破壊によるサンプル消失によってついにベースキャンプの放棄及び総員即時撤退を命令。

最終被害報告は死者六名、重軽傷者二十一名。

以後、同系列の作戦には総員に対装甲目標用破壊兵器等の所持の必要を提言する。

なお、未確認ながら前述の日本人少年が重傷を追いながらもT型を斬殺、後に覚醒化した同T型が負傷者を搬送していた第四カーゴヘリに侵入するも、同乗していた日本人少年により再度撃退されたとの報告在り。

詳細は不明……………

余章

アメリカ中西部の荒野を貫くハイウェイを、一台の車が走っていた。

長い時間走り続けた車は、やがて荒野のど真ん中にある小さな公園を見つけるとそこに止まった。

止まった車から、墨色で染め上げられ胸に五芒星の紋が入った小袖袴を着込んで、更紗の布で包まれた細長い包みを持った東洋系の男性と、花束を持って眼鏡を架けた白人女性が降りてきた。

荒野を吹く風が男性の袖をそよがせると、袖に隠れていた左腕の傷跡が目についた。

二人は、その小さな公園の中央に有る石碑の前に立ち、眼鏡を架けた女性がそれに花束を捧げた。

『ラクーンシティ伝染病死者慰霊碑』と掘り込まれた石碑に向かって、二人は無言でしばし黙祷をした。

「スミスは？」

「仕事で遅れるかもと言っていたが……」

黙祷をし終えた女性が、背後にいた男性へと声を掛け、男性がそれに答えた時、遠くからヘリのローター音が聞こえてきた。

音の方向を二人が見ると、州警察のエンブレムが入ったヘリがこちらへと近付いて来ていた。

ある程度の距離まで近付いた所でヘリはその場でホバリングし、そこから降ろされたロープを伝って一人のSWAT隊員が降りてきた。

その場で手を振って乗せてきたヘリを送ったSWAT隊員は、二

人の方へと歩み寄る。

「久しぶりだな、レン」

「元気そうだな、スミス」

SWAT隊員―スミスの笑いながらの挨拶に、男性―レンも微笑しながら答える。

「ミリイも元気そうだな。おっとミセスミズサワと呼ぶべきかな」
「まだミスよ、式の予定は来年なもの」

女性―ミリイは笑いながら少し頬を赤くした。

「にしてもレン、何だその格好？ハロウインの仮装か？」

「こいつは御神渡流陰陽師おみわたの制服だよ。そういうお前もあんまり似合っていないぞ」

「悪かったな、どうせまだ新人だよ」

二人は一頻り笑うと、少し神妙な面持ちになった。

「あれから5年か、今思い出してもホントの事だったとは思えねえな」

スミスはタクティカルベストからポケットウイスキーを取り出すと、封を開けて石碑へと注いだ。

「あの後すぐに街は焼かれちゃったからな。残ってるのはこの慰霊碑とオレの傷跡ぐらいなもんだ」

レンも石碑を見ながら、その時の事を思い出した。

「あたし、今でもたまに夢に見るんだ。ゾンビに追われるあたしと、それに立ち向かう二人の事……」

「そいつは光栄だな」

空になったウイスキーボトルを仕舞いながら、スミスが微笑する。

「結局、何が原因だったのかすらオレ達には分からず終いだっただけだな」

「国家機密扱いで全部闇の中だ。調べたければCIAの諜報員にでもなるか、FBIのXファイル課にでも入るしかねえな」

スミスが冗談めかした事を言いながら、レンの方へと向き直った。

「もつとも、調べようとして暗殺されたりしたらかなわんからな。」

お互いの胸の内に仕舞っておく事にしようや」

「そうか……」

少し残念そうな顔をしながらレンは呟いたが、すぐにその表情を消した。

「せっかく久しぶりに会ったんだ。飲みにも行くか？」

「また目が覚めた時ゾンビがいたらどうすんだよ？」

「また倒すまでだ。この刃に賭けて」

レンは包みの中の刀を抜き放って天へとかざした。

かざされた刃は、太陽の光を受けて眩しいばかりに輝いていた……

終

次章

ここ数年間何者にも脅かされる事無く積み続けたホコリに足跡を記しながら、一人の男が寂れた廃工場の中を歩いていた。

ホコリが積もっているとはいえ、コンクリートで固められているはずの床に、不思議と彼の履いている厚底のコンバットブーツはまったく足音を響かせていない。

そのまま廃工場のほぼ中心に歩を進めた彼は、そこで足を止め周囲を見渡した。

彼は黄色人種特有の墨色の髪に、それと同色の小袖袴を着込み、手には更紗の布で包まれた細長い包みを持っていた。

鋭さと、冷静さを兼ね備えた瞳を持った彼を、この土地の住人達が見かけたら十中八九こう呼んだだろう。

サムライと。

その彼の前に、分厚いコートを着込んだ大きな影が現れた。

「あんたが、情報提供者か？」

英語での彼の問い掛けに、影は答えず片腕を持ち上げた。

途端、そこから何かが猛烈な勢いで飛び出し、彼を襲った。

それが何かを一瞬にして見切った彼は、無言で少しだけ体を横にずらした。

「手長か」

日本の妖怪の名を彼が短く言った時には、その軌道を完全に見切られた伸びる腕は彼のすぐ傍を通り過ぎる。

その時すでに、彼は更紗の包みの口を解いていた。

伸び切った腕が戻ろうとする時、彼は包みの中の物を掴み、素早く抜いた。

影が奇怪な悲鳴を上げる。縮んできた腕は半ばから両断されていた。

「人ではないようだな」

彼の呟きと、彼が抜いた白刃によって両断され、宙を待っていた腕が血をホコリの上に撒き散らしながら床へと落ちるのはほぼ同時だった。

「ならば容赦はしない」

彼は一瞬にして影との間合いを詰めると、手にした愛刀、みなもとぎよまろ源清麿を袈裟懸けに振り下ろした。

振り下ろされた刃は、影の着ていたコートを切り裂き、その中に仕込まれた防弾用のチェーンを露出させる。

「あれと同じか」

彼は呟きながら、手首を返して刃を逆にする、先程とまったく同じ軌道を逆に斬り上げた。

弾丸をも阻むはずの防弾用のチェーンが、先程の斬撃によって傷付けられた場所と寸分の狂いも無い同じ軌道の斬撃によって、その

下の肉体ごと斬り裂かれる。

周囲に鮮血を撒き散らしながら、影は断末魔の悲鳴を上げて床へと倒れ込んだ。

彼は刃に付いた血を振るい落としながら、視線を横へと向けた。

「助ける氣が有るならもつと早く出て来たらどうだ」

刀を鞘へと収めながらの彼の言葉に、うず高く詰まれた廃材の影から銃を構えた一人の男が出て来た。

「あんたが本当の情報提供者か？」

「ああ、そうだ」

男は答えながら、構えていたデザートイーグル50AEをゆつくりと降ろした。

「何でこんな真似をした？」

「お前が知リたがつている事は危険過ぎる。それを分からせるつもりだった。だが…」

「だが？」

男は彼の姿を上から下まで見て軽いため息をついた。

「まさかサムライが来るとは思いもしなかった」

「オレはサムライじゃない」

相手の否定に、男が少し虚を突かれた表情になる。

「日本の闇を司る陰陽寮五流派の一つ、御神渡流陰陽師の一人、水沢 練。それがオレだ」

「オンミヨウ？」

聞き慣れない言葉に首を傾げている男に、レンは更なる説明を加える。

「この国で言う所のエクソシストだ。そして、オレは五年前のラクーンシティの脱出者でもある」

「！」

後半を聞いた男の顔に驚愕が生まれる。それを見ながらレンはさらに加えた。

「教えてくれるんだろうな。五年前の真実を」

確たる決意を秘めて、レンはその言葉を口にした。

t o b e c o n t i n u e d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3016a/>

B I O H A Z A R D i r r e g u l a r

2010年10月31日23時14分発行